



# NEWS LETTER

## March 2025 Number 15

## ご挨拶

演劇映像学連携研究拠点代表 児玉 竜一

演劇博物館が運営する演劇映像学連携研究拠点は、2009年度より文部科学省から認定を受けた共同利用・共同研究拠点として活動を発展させてきました。本拠点の特色は、100万点を超える資料を収蔵する演劇博物館が母体であることを活かし、演劇博物館の収蔵資料のうち十分な学術利用がなされていない貴重な未公開資料・非公開資料を共同研究に供することにあります。

本拠点は具体的に、4種の共同研究事業を通じて、演劇・映像分野以外も含めた多彩な研究者による多角的かつ先進的な研究活動を推進しています。まず、「テーマ研究」は本拠点が提案した資料とテーマに関する共同研究事業です。「公募研究」は演劇博物館の非公開・未発表資料を対象とする共同研究課題を公募して実施しています。「奨励研究」は演劇博物館所属の若手研究者が中心となり、将来の共同研究の基礎となる資料調査を行っています。そして「主催事業」は本拠点主導により、国内外の研究機関や民間企業と連携して行う共同研究事業です。

2024年度は、2年間認められている共同研究チームの活動初年度にあたり、「テーマ研究」では、久保栄関連資料、倉林誠一郎旧蔵資料、および映画館チラシを対象とする3件を、また、「公募研究」では、岡本綺堂旧蔵資料、二代目市川團十郎栢蓺日記、九州地区劇団占領期GHQ検閲台本（ダイザー・コレクション）、田邊孝治氏旧蔵資料、坂川屋旧蔵常磐津節正本関連資料、小沢昭一旧蔵資料を

対象とする6件を採択し、それぞれの共同研究チームが研究活動をスタートさせました。

「奨励研究」では今年度新たに4件の研究課題が採択されました。小山内薫の演劇活動、戦後日本の演劇における第二次世界大戦の表象、広東省潮州歌冊の作品群をはじめとする中国演芸貴重資料、戦前～戦中日本のロマンチック・コメディ映画といった様々なテーマで演劇博物館の所蔵資料の調査・考証が進められました。そして「主催事業」は、①コロナ禍を経た舞台芸術のあり方の検討、②国内外の民間企業や研究機関との緊密な連携、③デジタル資源と技術の活用可能性の開拓の3つを柱として展開されました。

①の関連事業としては、5月に「チェルフィッチュ「映像演劇」をめぐって～“演劇性”のアップデート」と題したシンポジウムを開催し、コロナ禍を経た今、演劇にどのような新しい可能性が生まれているのか、チェルフィッチュの実践を通じて検討を行いました。②については、まず、当拠点が2018年度より行っている、演劇博物館所蔵のサイレント映画を用いてかつての多彩な上映スタイルを「再現」する試みを、今年度は国立映画アーカイブとの共催事業として発展させ、5月に演劇博物館所蔵の『朝顔日記』といった「旧劇映画」の義太夫入り上映を実現するための考証プロセスをワークショップとして開催しました。また、TOPPAN 株式会社と2016年から継続しているくずし字判読支援事業では、過年度に作成した字形データセットを修正、さらには「菅原伝授手習鑑」の文字譜データベースを作成し、内容の充実と精度の向上を図りました。さらに、共同利用・共同研究拠点間の連携事業として京都芸術大学舞台芸術研究センター「舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点」と共同で「疫病・戦争・災害の時代に―サミュエル・ベケット映画祭2024」を開催し、好評を得ました。このほか、バーミンガム大学やポートランド州立大学との連携事業も実施し、国際的な研究交流を継続的に推進しています。③に関してはオープンリールテープやカセットテープなどの音声資料を中心にデジタル化を積極的に進め、貴重な資料の保全と共有に努めています。

本拠点はこれからも演劇博物館が所蔵する豊かな研究資源とデジタル技術を活用し、当該分野の研究を牽引するハブとして活動してまいります。今後とも皆様のご支援とご協力を賜りますよう、心からお願い申し上げます。

### contents

■拠点代表あいさつ	1 p
■令和6(2024)年度 テーマ研究成果報告	2 p
■令和6(2024)年度 公募研究成果報告	5 p
■令和6(2024)年度 奨励研究・拠点関連連携事業成果報告	11 p
■令和6(2024)年度 拠点主催事業成果報告	12 p
■Mission and Vision	15 p
■Report on Principal research, fiscal 2024	16 p
■Report on Selected research, fiscal 2024	19 p
■Encouragement Research Project/ Collaborative Projects	25 p
■Project Organized by the Center	26 p

## テーマ研究

# 1

## 久保栄資料の調査研究

研究代表者：阿部由香子（共立女子大学文芸学部文芸学科教授）

研究分担者：赤井紀美（東北大学大学院文学研究科准教授）、熊谷知子（早稲田大学演劇博物館助手）

### 【研究目的】

本研究では、戦前から戦後にかけて日本の新劇界を牽引した劇作家・演出家の久保栄（1900～1958）の、未整理・未公開の演劇博物館所蔵の資料について、特に久保栄と築地小劇場との関わりに着目し調査・翻刻・考証を行う。1926年に築地小劇場文芸部に入った久保は小山内薫、土方与志のもとで演劇を学び、小山内没後に代表作を次々に発表する。久保の創作活動において築地小劇場での経験および小山内からの影響は大きく、これらを検討することで、一次資料をもとにした久保栄の基礎的研究の基盤を固めることができると考える。

### 【研究成果の概要】

改めて、本研究チームの対象資料について確認したい。久保栄は築地小劇場から新協劇団、劇団民芸など様々な新劇の劇団の活動・創設に関わり、戦前から戦後の新劇界で大きな地位を占めた作家である。「五稜郭血書」（1933年初演）「火山灰地」（1938年初演）「林檎園日記」（1947年初演）など現在まで上演が繰り返される作を多数執筆し、島崎藤村「夜明け前」（1934年初演）をはじめとする舞台の演出も手掛けた。

日本の新劇史を考えるうえで、また日本のリアリズム演劇の歴史において久保栄の存在を論じることは不可欠だが、現在その研究が進展しているとは言い難い。

演劇博物館所蔵の久保栄資料は久保の養子の久保マサ氏より寄贈されたもので、段ボール40箱以上にわたる。資料は日記、草稿、メモ、書簡、家計簿、演出ノート、写真、プログラム、チラシ、オープンリールテープなど多岐にわたっており、ほぼ未整理の状態である。

本年度は混在する様々な資料を、分類整理することに多くの時間を割いた。分類後の自筆の原稿とノート、書簡類を中心に目録化を行っており、また久保栄旧蔵の書籍についても確認を行った。久保の資料は全体的に劣化が著しく、デジタル化の必要がある資料も多い。分量が多いため、まずは状態の良いものからスキャナーを用いてデジタル化を行うことも検討している。

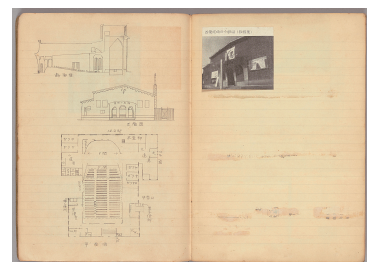
今回の整理により、久保が執筆した伝記『小山内薫』

（文芸春秋新社、1947）の執筆メモ（ノート）や、全集未掲載の村山知義との書簡、また、主要作品の自筆原稿が発見された。いずれも貴重な一次資料であり、特に小山内薫についての資料は久保と築地小劇場の関わりを検討するうえで非常に重要なものであると考える。

本年（2024年）は築地小劇場開場100年の年にあたり、チームメンバーがいずれも築地小劇場関連の展示を行っている。阿部は展示「演劇熱を爆発させた青年達―築地小劇場100年」（共立女子大学1階ロビー、2024年9月18日～10月9日）を、赤井と熊谷が「築地小劇場100年―新劇の20世紀―」（早稲田大学演劇博物館 1階 六世中村歌右衛門記念特別展示室・2階 企画展示室Ⅰ・Ⅱ、2024年10月3日～2025年1月19日）を担当した。

後者の展示では今回の整理で発見された『小山内薫』執筆メモ（ノート）をはじめ、久保栄関係の資料を多数展示した。本研究チームの成果が展示に生かされた形であり、築地小劇場とその後の新劇の流れを考えるうえで久保栄の存在が非常に大きかったことが、通史的な展示を行ったことで、より明確になったと考える。

また、久保資料を検討するうえで、演劇博物館にすでに収蔵されている関連資料の確認も不可欠である。特に築地小劇場に関するものでは、久保栄の翻訳作品ではじめて築地小劇場で上演された「ホオゼ」の大道具帳や、音響効果を担当した和田精旧蔵の台本などがあり、久保資料と照合することでそれぞれの資料の性質がより明確になると考える。今年度は和田精資料のデジタル化を行っており、これらの資料の具体的な調査は来年度行う予定である。



久保栄旧蔵『小山内薫』執筆メモ（ノート）[72037-1]  
Memo (notebook) for writing Osanai Kaoru, Kubo Sakae materials

## テーマ研究 2

# 倉林誠一郎旧蔵資料を中心とする戦後新劇の調査研究

研究代表者：後藤隆基（立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター特定課題研究員）

研究分担者：神山彰（明治大学文学部名誉教授）、児玉竜一（早稲田大学文学学術院教授）、米屋尚子（文化政策・芸術運営アドバイザー）、藤谷桂子（早稲田大学図書館司書）

### 【研究目的】

敗戦直後の1946年に俳優座に入団した倉林誠一郎（1912～2000）は、56年に俳優座劇場を設立し、81年に代表取締役役に就任した。また、65年には日本初の芸能実演家の統一団体である日本芸能実演家団体協議会（芸団協）の設立に参画し、舞台芸術における実演家の権利保護や文化活動の支援、政策提言等に多大な影響を及ぼした。

本研究では、倉林誠一郎旧蔵資料のうち、日記・スクラップブック・手帳・ノート・書簡等の調査・考証を通して、演劇制作者としての倉林誠一郎の再評価を行い、戦後新劇の基礎的研究のための基盤形成を図るものである。倉林自身が「創造団体と観客との中間に存在し、両者の立場、考え方を客観的に、正しく理解し、それをつたえ合うという、重要な役割を担っている」（『演劇制作者』）と規定した「演劇制作者」の重要性は、演劇における観客論を考察するためにも看過できないものであるが、これまでは研究対象と見なされてこなかった。倉林の事績を明らかにすることで、実際に演劇現場を運営し、公演を実施してきた制作者の影響力を測定し、作家・演出家・俳優等の創作主体からの視点にとどまらない演劇（史）研究への視角をひろくとともに、戦後新劇の多面的な興行様態等を解明することを目的とする。

### 【研究成果の概要】

2020年度に演劇博物館で受け入れた倉林誠一郎旧蔵資料3,004点（図書：387点／雑誌：835点／博物資料：1,782点）は、過去の拠点テーマ研究「倉林誠一郎旧蔵資料の調査研究」（2022～23年度）における調査によれば、①日記、②自筆メモ・日誌・ノート、③書簡類、④俳優座・俳優座劇場関係資料、⑤各種演劇関連団体関係資料（書類・冊子等）、⑥舞台写真（ネガフィルム等を含む）、⑦スクラップブック、⑧公演プログラム、チケット、⑨チラシ、ポスター等、⑩新聞雑誌の切り抜き、⑪図書・雑誌、⑫各種資料の複写物等に分類する

ことができる。

本プロジェクトメンバーは、前掲の拠点テーマ研究において倉林資料の整理を行っており、簡易的な目録を作成したものの、個別の資料に関する詳細な調査・考証にまで到達しておらず、各種資料の関連等も未検討の状態であった。

なかでも、倉林が1947年6月から2000年3月まで書き継いでいた日記（全79冊）については、代表者および分担者（神山、児玉、藤谷）が、科学研究費補助金基盤研究（C）「倉林誠一郎資料の調査・考証に基づく戦後新劇の基礎的研究」（研究代表者・後藤隆基 21K00199、2021～2023年度）として、占領期に書かれた日記の翻刻を行っており、本年度はその成果をも継承して、翻刻作業を進めてきた。

本プロジェクトメンバーによる翻刻およびチェック作業等を通して、1946年から1952年までの日記の翻刻を一通り終えることができた。これらについては、次年度の出版をめざして準備を進めており、戦後新劇（演劇）研究に資する資料として、ひろく成果を公開したい考えである。

また、劇団俳優座に、敗戦後まもなく研究生として入座し、現在劇団代表を務める岩崎加根子氏にインタビューを行う機会を得た。その内容は、後藤隆基「俳優座で七十年：変わりゆく六本木のまちと劇場閉館」（『東京人』486号、2024年12月）として公開されている。

今後の展望について述べる。上述のとおり、次年度には、占領期の倉林日記の翻刻成果を公開すべく、本プロジェクトメンバーによる解題等を付して出版する予定である。また、それ以降の日記についても翻刻を進めたい。占領期に続く日記は、俳優座劇場の建設・開館にあたる時期であり、2025年に同劇場が閉館することに鑑みても、倉林日記の調査・翻刻を通して得られる成果は大きいと想定される。あわせて、日記以外の資料も含めて調査を行い、戦後新劇の動態について研究を遂行していく計画である。



## テーマ研究 3

# 映画関連資料を活用した戦前期の映画興行に関する研究

研究代表者：岡田秀則（国立映画アーカイブ主任研究員）

研究分担者：紙屋牧子（武蔵野美術大学非常勤講師）、柴田康太郎（早稲田大学総合人文科学研究センター次席研究員）、白井史人（慶應義塾大学商学部准教授）

## 【研究目的】

本研究は、演劇博物館所蔵の映画館チラシの目録化・分析をおこなうことにより、戦前期日本の映画館におけるライブパフォーマンスを含めた興行の諸相を考察することを目的とする。また当チームが先行して遂行した、公募研究「映画宣伝資料を活用した無声映画興行に関する基礎研究」（2020～2021年度）、テーマ研究「映画館チラシ」を中心とした映画関連資料の活用に向けた調査研究」（2022～2023年度）における研究成果をふまえたうえで、更に演劇博物館所蔵の駒田好洋旧蔵資料も研究対象に加えることによって、草創期の無声期映画興行にかんしてより具体的に解明することも目指す。

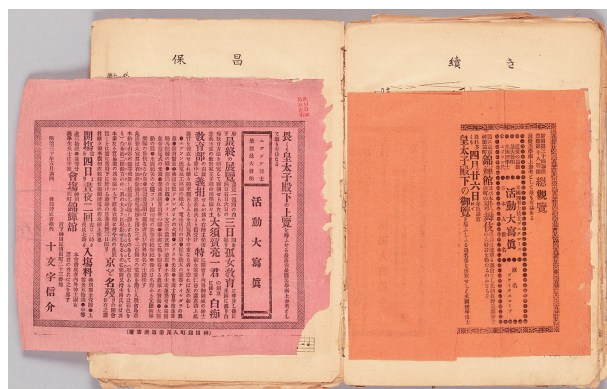
## 【研究成果の概要】

本年度は、2020年度に端を発する当チームの研究活動を総括した成果公開に重点を置きつつ、新たに研究対象とする演劇博物館所蔵の駒田好洋旧蔵スクラップブックの目録化に着手した。また神戸映画資料館所蔵の無声映画のフィルム1本をデジタル化した（協賛：柳井イニシアティブ、作業：東京光音）。当該作品は2025年度の公開研究会において、映画説明と伴奏を付した「再現」上映として公開する予定である。

2024年5月に、国立映画アーカイブにおいて、トーキー転換期に製作された稀少な映画作品のフィルム試写をおこなったうえで研究会を開催した。研究会では、紙屋牧子（研究分担者）が「マキノトーキーの活動と作品」という題目で、柴田康太郎（研究分担者）は「日本映画と語り物の交差」という題目で発表をおこない、参加者の白井史人（研究分担者）およびゲストの京谷啓徳氏（学習院大学）、西澤駿介氏（青山学院大学）と検討をおこなった。2024年12月には、柴田と紙屋が演劇博物館において駒田好洋旧蔵資料の整理に携わった経験を持つ上田学氏（神戸学院大学）に、ヒアリングをおこなった。

成果公開としては、柴田が2024年4月に北米4都市および早稲田大学における無声映画上映企画 *The Art of the Benshi 2024 World Tour*（主催：UCLA-早稲田柳井イニシアティブ、共催：UCLA Film & Television Archives、早稲田大学演劇博物館 演劇映像学連携研究拠点、協力：国立映画アーカイブ、松竹株式会社、

早稲田大学演劇博物館）に専門家として参加した。その一貫としてJAPAN HOUSE Los Angelesにおいて開催された公開講座 *The World of the Benshi: Lecture and Demonstration* には、柴田に白井と紙屋を加えた3名が登壇し、柴田は“The Voices of Benshi in Japan and Beyond”、紙屋は“The ‘Modernity’ of Japanese Cinema in the 1910s and 1920s”、白井は“Silent Film Music Across the Pacific”の題目で講演した。その後、片岡一郎氏（活動写真弁士）の『血煙高田馬場「最長版」』（日活製作、1928年、伊藤大輔監督）の実演を挟み、柳井イニシアティブのディレクターとしてイベントを主導したマイケル・エメリック氏（UCLA）の進行で来場者とのQ&Aも実施した。2025年1月27日には演劇博物館にて、ジム・ドーリング氏（ランドルフ・メーコン大学）とその学生たちと戦前の日本映画の音文化にかんするワークショップ *Exploring the Power of Voice & Music in Japanese Silent Cinema* を開催した。



駒田好洋旧蔵資料より [16758-4\_036]  
From the Komada Koyo material



ワークショップ（2025年1月27日）での学生たちとのQ&Aの様子  
登壇者は左より柴田（オンライン参加）、白井、片岡一郎氏、紙屋  
Q&A session with students at the workshop (January 27, 2025)  
From left: Shibata (participating online), Shirai, Kataoka, and Kamiya



公募研究は審査を経た研究計画に基づく複数の共同研究プロジェクトにより構成され、演劇博物館の収集品の有効利用を目指すものです。プロジェクトに対し、本拠点は共同研究の場と資料を提供します。下記のプロジェクト・メンバーの肩書および所属は年度開始時点のものです。

## 公募研究

# 1

## 岡本綺堂旧蔵資料に関する基礎的研究

研究代表者：横山泰子（法政大学理工学部創生科学科教授）

研究分担者：東雅夫（文芸評論家、アンソロジスト）、小松史生子（早稲田大学文学学術院教授）、鈴木優作（鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター特任助教）、原辰吉（世田谷文学館学芸員）、松田祥平（大谷大学文学部任期制助教）、脇坂健介（学習院高等科）、勝倉明以（名古屋市立東丘小学校）

### 【研究目的】

本研究では、2022年に生誕150年を迎え、演劇と文学という両領域において大きな足跡を残した岡本綺堂（1872～1939）旧蔵資料の基礎的調査・分析を行うのが目的である。綺堂は戯曲、劇評、小説、随筆、翻訳と様々な分野で活躍した作家であり、近年では近代演劇、近代文学の研究領域のみならず、怪異・怪談・妖怪研究など多様な領域からも注目を集めている。本研究では、特に未発表・未翻刻の日記に着目し、これらのデジタル化および翻刻を行う。当該資料は作家岡本綺堂の後半生を知るうえでの一級資料と思われ、翻刻を行い広く公開することで、綺堂の活動や創作に対する新たな視点を提示できると考える。さらに、学際的な視点から、綺堂の活動ならびに当時の劇界や文学界、メディアや社会背景の一端を捉え直すことを目指す。

### 【研究成果の概要】

#### ○関連資料のデジタル化

演劇博物館には1923年7月から1938年12月までの綺堂の自筆の日記が所蔵されている（1938年10月～12月は岡本経一氏の筆）。ノートに縦書きで記されており、計30冊ある。関東大震災により多くの蔵書と、それまで書き続けてきた日記を焼失した綺堂だが、震災時に持ち出した荷物のなかに書きかけの日記を見つけ、書き継ぐことにしたという。亡くなるまでの16年間、その日の天気、気温、行動、仕事の進行、面会者などが細かに記されている。

岡本経一氏が『岡本綺堂日記』『岡本綺堂日記・続』（青蛙房）として、1923年から1930年までの日記を翻刻し出版したが、残りの1931年から1938年までの8年間の日記が未公開・未翻刻である。本チームでは未公開の箇所の翻刻を行う。今後日記全体の画像をオンラインで公開することも検討しており、全日記のデジタル化を行った。

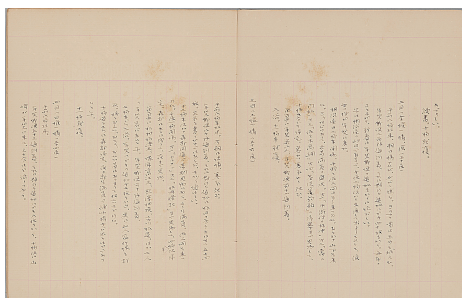
日記に加え、次の2点の資料のデジタル化も行った。綺堂の作品は海外でも上演されて

おり、1927年6月にパリのオデオン座で「修禅寺物語」が上演された際の「在フランス日本大使館発行の岡本綺堂宛上演許可書類」が演劇博物館に所蔵されている。戦前の海外上演の具体的な資料であり、綺堂作品の幅広い受容を考えるうえで重要な資料と考える。

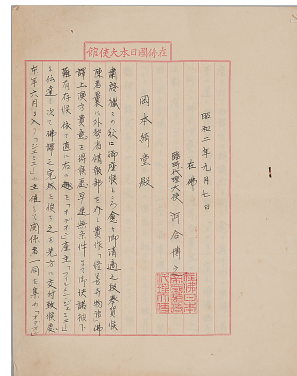
また、綺堂没後すぐの1939年3月14日から演劇博物館では岡本綺堂を偲ぶ展覧会が開催されており、3月25日には記念講演会が行われた。池田大伍、浜村米蔵、岡鬼太郎、木村錦花、川村花菱、田村西男、河竹繁俊らが登壇し綺堂について語ったが、その際に筆記された速記録が演劇博物館には所蔵されている。館内記録として残されたもので公開されてこなかったが、明治期から昭和にいたるまでの主に劇界と綺堂の関わりが語られており、貴重な談話である。以上2点の資料も今後翻刻を行い公開する予定である。

#### ○日記の翻刻状況

本年度では、1931年1月から1933年1月までの翻刻を行った。当該部分の日記には綺堂の晩年の旺盛な執筆活動の状況や後進の育成に力を注ぐ姿がうかがえる。また都市生活者としての綺堂の日常が丁寧に記されており、社会風俗史としても貴重な資料であることがわかった。年度内には、1931年1月から1932年12月の2年間分の日記の翻刻を資料の画像とともにオンラインで公開予定である。目的遂行のため、年度途中で研究協力者を増やし、公開に向けて鋭意作業をすすめている。また来年度には公開シンポジウム、研究会を行うことも検討している。



岡本綺堂日記 1931年1月 [8114-015]  
Diary of Okamoto Kido, January 1931



在フランス日本大使館発行の岡本綺堂宛上演許可書類 [29779]  
Permission document issued by the Embassy of Japan in France addressed to Okamoto Kido

## 日記から考える歌舞伎役者を中心にした江戸中期の文芸圏研究

研究代表者：ビュールク・トーヴェ（埼玉大学人文社会科学部研究科教授）

研究分担者：稲葉有祐（和光大学表現学部准教授）、日置貴之（明治大学情報コミュニケーション学部准教授）

### 【研究目的】

本研究の目的は「二代目市川團十郎栢庭日記」をもとに、①「栢庭日記」の所縁や信憑性について検討すること、②江戸中期の歌舞伎役者を中心として文芸圏のあり方を明らかにすることである。『栢庭日記』は、日記本『柿表紙』とともに、狂歌師鹿都部真顔の主治医とその息子が写したもので、江戸中期の歌舞伎役者の生活、また彼らをまつわる文芸圏について記されている重要な資料である（二代目團十郎の日記原本は文化初期に焼失している）。

本研究は、この日記本を出発点として、享保期の歌舞伎役者を取り巻く環境を明らかにし、歌舞伎役者や俳人・文人の関係を明らかにするものである。

### 【研究成果の概要】

本年度は、第一に日記本の注釈と解説の継続、第二に日記本に登場する歌舞伎役者と俳人の関係を具体的に示す東京大学総合図書館酒竹文庫所蔵『貞佐点俳諧帖』『指南車の』百韻のうち、26句から50句目までの註解および同百韻の作者に関する調査、第三に藝能史研究会にて、柳沢信鴻の日記にみる大名屋敷での素人歌舞伎公演と歌舞伎界の関連についての招待講演発表「宴遊日記の世界——柳沢信鴻邸の歌舞伎公演とお狂言師たち」を行い、主に3点の研究成果が挙げられる。

二代目市川團十郎の日記詳解は研究代表者ビュールクが引き続き行い、その第8回は『埼玉大学紀要 教養学部』第60巻第1号、第9回は『埼玉大学紀要 教養学部』第60巻第2号に発表した。日記に記された時期は享保19（1734）年6月8日～18日と6月19日～24日であり、二代目團十郎は目黒の別荘で妻翠扇と子供達を過ごし、俳人初代・二代深川湖や市村座座元九代目市村羽左衛門（俳号何江）らと共に品川の遊郭で遊んだり（6月8日）、祐天寺の方丈二代目祐天の歌舞伎観劇体験を踏まえた説法を聞いたり（6月19日）、その夏休み中でもお盆狂言の世界について狂言作者二代目通打治兵衛（俳号英子）と相談したり（6月13日）など。これらの日記記録から、歌舞伎役者と江戸の文人たち、さらに浄土宗の僧侶たちの日常での関わり方が具体的に見えてきた。

『貞佐点俳諧帖』『指南車の』百韻は享保13（1728）年のもので、その調査は分担研究者稲葉有祐が主導的に行い、研究代表者ビュールクは協力者として参加した。その百韻のうち、26句から50句目までの註解は稲葉有祐、荻原大地、小林俊輝、劉欣佳、ビュールク共著「貞佐点「指南車の」百韻註解（二）」として『演劇研究48号』に発表した。「指南車の」百韻は享保13（1728）年12月14日、俳人豊島佳風（有紀堂）追善百韻連句会で読まれたものであり、連衆には、歌舞伎役者二代目市川團十郎（三升）や二代目中村七三郎（少長）、狂言作者の村瀬源四郎（五舟）、二代目中村清三郎（藤橋）、江田弥市（富百）、中村座の木戸番もしくは表役の里郷、大通十八の筆頭で一説に助六のモデルとされる大口屋次（治）兵衛（暁雨）などパトロンが並んだ。読んだ句には助六や道成寺など演目の当時の演出や役者評判記の内容を仄めかすような内容の句もあり、歌舞伎と俳諧の世界の密接な関係をさらに明確に示した。

招待講演発表「宴遊日記の世界——柳沢信鴻邸の歌舞伎公演とお狂言師たち」は藝能史研究会の十二月東京例会で行い、代表者ビュールクは柳沢信鴻の「宴遊日記」にみる安永2年6月と9月の2回、信鴻本人が染井屋敷で主催した歌舞伎公演に関わる記録を分析した。これらの記録から、信鴻本人は当時江戸の人気役者だった初代中村仲蔵や四代目岩井半四郎、四代目市川團十郎の所作場面を家臣や女中らに写させ、それに上方の浄瑠璃本から借りた筋に当てはめて、新作を作ったという経緯がわかった。また、こうした舞台に側室お隆は複数の立役を演じ、信鴻一家は全面的に関わっていた可能性を示した。また、公園の準備の際、屋敷の女中らは初代仲蔵が勤めていた中村座の芝居茶屋松屋を通して、仲蔵が舞台で使う小道具やカツラなど借りたりすることがわかったので、歌舞伎界はこうしたパトロンたちの歌舞伎趣味を応援し、親密に関わっていたことがわかった。

以上の3点は本研究の2024年度の主な成果である。今後、さらに二代目團十郎の日記にみられる歌舞伎の関係者と江戸の文人・俳人の具体的な関わり方を通して、江戸の文芸圏のあり方を明らかにする。



# 公募研究 3

## GHQ占領期における地域演劇の実証的研究——九州地区を中心に

研究代表者：小川史（横浜創英大学こども教育学部教授）

研究分担者：須川渡（福岡女学院大学人文学部准教授）、畑中小百合（大阪大学非常勤講師）

### 【研究目的】

本研究の目的は、敗戦直後に九州地区で行われた演劇の性格を明らかにすることである。研究は、九州地区劇団占領期GHQ検閲台本（ダイザー・コレクション）の分析を通して行う。

### 【研究成果の概要】

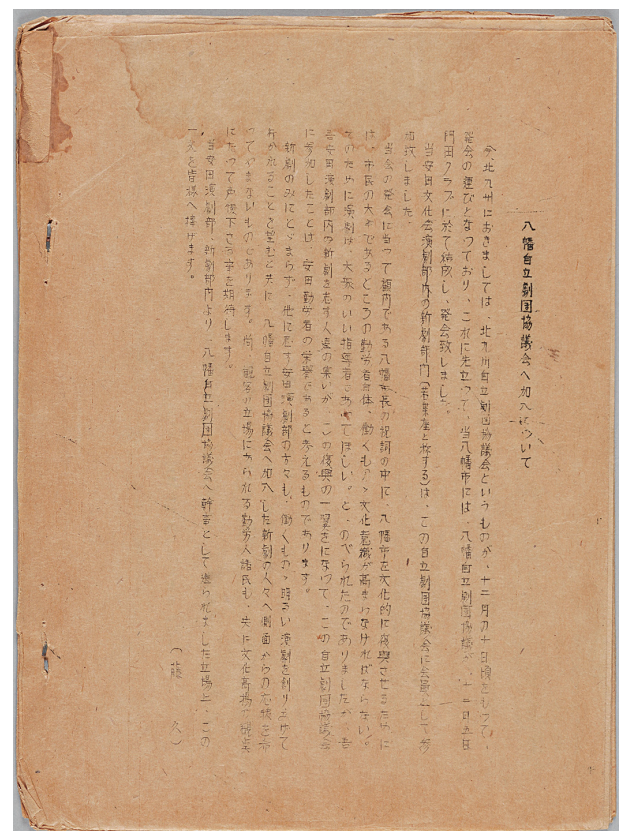
今年度はダイザー・コレクションのなかから、台本27点のデジタル化を行なった。今年度までの研究成果は、2024年12月1日（日）に東京経済大学で開催された日本演劇学会のパネル「GHQ占領期における地域演劇の実証的研究：九州地区を中心に」で発表した。なお、各研究分担者それぞれの調査は以下の通りである。

素人演劇・職場演劇・組合演劇については、台本に記載された劇団名や作者などの情報を、演劇専門誌や関係者の著作に含まれる情報と照合し、各劇団の性格を可能な限り特定する作業を行なった。また、地域の演劇活動の検閲申請の実態を調査した。

熊本県の劇団では、戦後の熊本新劇の草創期を支えた劇団文藝座の活動の解明を進めた。主宰の霜川遠志（1916～1991）は戦前ムーランルージュで劇作を学び、執筆した上演台本は15本確認されている。霜川は習作ともいえる『からまつ風』『自らの土地』『ふるさとの風』で、復員軍人や婚約者、農地改革を主題に、戦後改革の中で取り残された人物の葛藤を描いた。彼の作品は、新しい価値観に適応しようとする人々と、古い価値観に縛られる人々との間にある大きな溝を描写している。また、占領期終了後には、これらの習作を再構成した戯曲『田園狂詩曲』（1955）を発表し、戦後社会の分断や暴力性を浮き彫りにしながら、アメリカの占領政策に踏み込んだ視点を示している。霜川の占領期の作品は、同時代の熊本で活動した少女歌劇オリオン座が手掛けた新しい価値観を称揚する作品群とは異なり、その後の時代を先取りする萌芽的な意義を持っていたといえる。これらの研究成果については、8月の近現代演劇研究会および12月の日本演劇学会で報告した。

大衆演劇ジャンルについては、現代でも大衆演劇の劇団が上演している外題と同じ内容のものや、そのルーツと考えられるものがいくつも含まれていることがわかってきた。ダイザー・コレクション以外に台本がほと

んど残されていない大衆演劇で、占領期から現代まで同じ内容の外題が変わらず上演されていることが証拠づけられるのは画期的であると言えよう。また、戦前・戦後に九州地区で人気を集めた初代・樋口次郎（1906～1970）とその劇団が申請した台本（全66件／58タイトル）について、その内容を精査した。『名月赤城山』など時代劇が多いが、浪曲劇、復員兵を主役とする現代劇、不条理劇などもあり、当時の人気劇団が観客の心をつかむために様々な上演の工夫を行っていたことが明らかになった。これについては12月の日本演劇学会にて発表した。



『職長』（作：藤久勝俊）の裏表紙〔GHQ00543〕

八幡市で結成された八幡自立劇団協議会が紹介されている。こうした組織は、当時、全国的に多くの地域で設立されていた。Back cover of “Shokuchō” (written by Fujihisa Katsutoshi). The Yawata Independent Theater Council, formed in Yawata City, is introduced. Such organizations were established in many areas throughout Japan at that time.

## 田邊孝治氏旧蔵講談資料の研究

研究代表者：今岡謙太郎（武蔵野美術大学造形学部教授）

研究分担者：佐藤かつら（青山学院大学文学部教授）、佐藤至子（東京大学文学部教授）、高松寿夫（早稲田大学文学学術院教授）、瀧口雅仁（恵泉女学園大学講師）、菅野俊介（東京大学大学院）

## 【研究目的】

故田邊孝治は、新潮社で長年編集者をつとめる傍ら講談研究を進め、雑誌『講談研究』を編集発行して資料紹介また研究成果を発表してきた人物である。本研究は早稲田大学演劇博物館に寄贈された田邊氏旧蔵の講談関係資料の全容を解明することを目的とする。

本研究では、まず音声資料の全容を把握しデジタル化を進めるところから出発し、録音された演目の目録化を進める。現在、音声資料の簡易目録は作られているが、内容と突き合わせての正確な目録はまだ作られていない。詳細な目録の作成また現行演目との同定が急務であるといえる。

## 【研究成果の概要】

本年度は、資料の収められている段ボール箱を開梱し、中身の確認・整理・調査をおこなうところから作業にあたった。既に仮目録は作成されているが、その項目と現物とを照らし合わせ、項目に記されている演目・演者との齟齬がないか、また記されている演目・演者以外の音声資料が含まれていないかどうかについて照合を行った。

## ○本資料の特色

本資料は、おおよそ以下の五種類に大別される。

- ①市販されたレコード、カセットテープ、CD等の講談演目の音声資料。
- ②田邊氏自身がエアチェックしたと考えられる講談演目のカセットテープによる音声資料。
- ③田邊氏が長年主催していた「新進五人会」「俊英五人会」等での口演を録音したと思われる講談演目のカセットテープによる音声資料。
- ④田邊氏自身が取材した際に録音されたと考えられる、講釈師の生い立ち、芸談また演目に関するカセットテープによる音声資料
- ⑤落語、声色など講談に関連する領域に関する市販されたカセットテープ、CDによる音声資料

この他、ハミリビデオ、VHSによる映像資料の少数ながら含まれる。

## ○本資料の意義

田邊氏が収集した講談関係の資料は多岐にわたるが、中でも昭和40年代～平成10年代にラジオで放送された講談の音声資料、また講釈師自身に取材した際に

録音した音声資料、さらには田邊氏が主催した講談の会を録音した音声資料は他に類をみないと言ってよい。これらの資料の中でも特に貴重と考えられるのは、②～④の田邊氏が個人的に蒐集した音声資料で、録音時の状況から見て他に所蔵があるとは考え難い資料が多くを占めている。例を挙げれば桃川燕雄による「佐倉義民伝」、木偶坊伯鱗による「真田の入城（旗揚げ）」等は演者の活動時期等から見てカセットテープ普及の初期段階で録音されたものと思われる。また桃川若燕「雪時雨三国峠（いかけ松のうち）」等は、カセットテープ普及以前にオープンリールで録音したものをカセットテープにダビングし直したものと考えられる。音質が良好とはいえないものも含まれているが、研究資料また鑑賞には十分耐えうるものと考えられる。

## ○作業進展の経過

今年度は主にしてカセットテープのMP3コンバーターを用いた、手作業でのデジタル化を行い、音質の劣化を防ぐとともに将来的に視聴覚資料として活用できるように準備を行っている。デジタル化の過程において劣化等によりカセットテープが破損する事態も生じたが専門業者に依頼し、最小限の損傷にとどめデジタル化を遂行している。

現段階では仮目録に搭載のある887点のうち、おおよそ3分の1程度の点数を確認・デジタル化を行った。これにより、これらの音源に関しては音質の劣化を心配せずに今後の調査・研究を進めることが可能になった。一方で残る約3分の2の音源に関しては確認・デジタル化が行われておらず、次年度以降の課題となる。

一方、これと並行して行っている演目自体の確認・同定は、長編演目の一部が多く含まれているためもあり、副題等の設定またどの長編演目のどの部分であるかを同定することが困難な部分もある。これについては、速記等に記された演目との同定を今岡が中心となっており、現行演目との同定に関しては瀧口雅仁氏を中心に作業を行っている。

作業の進展に伴い、演目の同定には他の音声資料、文献資料との比較検討が必要となることが想定される。そのため今後は大阪公立大学所蔵の吉沢英明氏旧蔵の講談速記本、ワッハ上方等諸機関における視聴覚資料等の調査を行い、本資料との比較検討を行う予定である。



## 公募研究

## 5

## 常磐津節正本板元坂川屋が遺した印刷在庫の概要調査

研究代表者：竹内有一（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授）

研究分担者：鈴木英一（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、常岡亮（常磐津協会理事、常磐津家元後嗣）、阿部さとみ（武蔵野音楽大学非常勤講師）、前島美保（国立音楽大学准教授）、重藤暁（早稲田大学エクステンションセンター講師）、小西志保（京都市立芸術大学共同研究員）

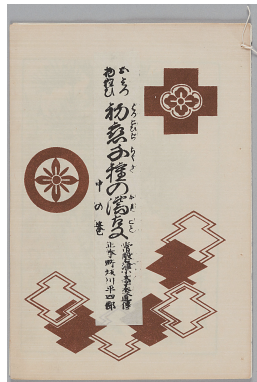
## 【研究目的】

坂川屋は、幕末の1860年に板株を常磐津正本板元の伊賀屋から受け継いで再刊を続け、以後昭和期まで新刊も行い、1987頃まで板木で正本（稽古本）を刷り立てた板元である。この板元が旧蔵し演劇博物館に寄贈されて現存する「印刷在庫」群（刷り立てた正本の在庫および未成品、全47箱、点数は数万点か）が研究対象資料「坂川屋旧蔵常磐津節正本関連資料」である。当該年度は、対象資料の総量の4分の1について概要を調査し、その結果を記録した目録の作成を主たる目的とした。

研究対象資料は全47箱に収納されている。板元の営業当時の梱包状況にある程度継承している部分もあると考えられる。その貴重な情報を記録として残すため、箱に収納された状態、資料を束ねた梱包の状態を撮影する。また、梱包を解く作業にあたっては、梱包の状態をなるべく継承するよう留意する。



昭和末期の坂川屋による梱包が保持されている。閉業時の梱包・未成品をどう整理して研究の俎上に乗せるかは難題である。「千代の友鶴」という包みには、その稽古本の丁合前の印刷物が約百組。包みに書かれた数字は、昭和53年12月20日の意か。資料番号[50393]の一部。Sakagawaya's packaging from the late Showa period is retained. How to organize the packaging and unfinished copies left after the publisher closed down to make them available for research is a difficult problem. The Chiyo no Tomozuru box contains approximately 100 sets of printed materials from before the collation of the practice book. The number on the wrapping could mean December 20, 1978. Part of document number [50393].



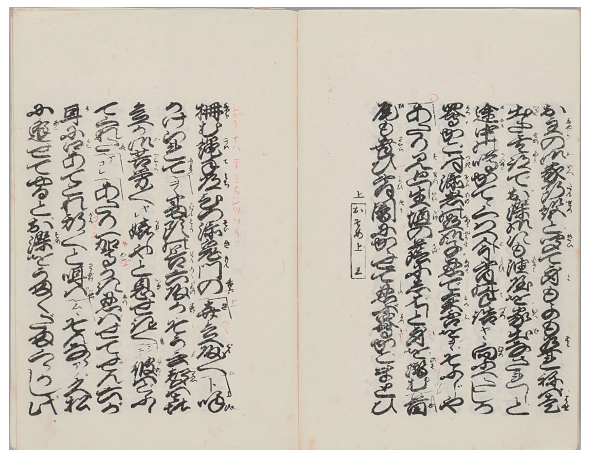
稽古本「初恋千種の濡事」中巻（お光狂乱）の未成品[50393-018]。表紙・本文全丁・奥付の丁合を整え、綴じ穴をあけ、最後に糸綴を待つ状態。右上の紙縫りは1995年の事前調査でつけられたもの。

Unfinished copy of the middle volume of the Hatsukoi Chigusa no Nuregoto practice book (Omitsu Kyoran). The front cover, all pages of the text, and colophon have been prepared, and the binding holes have been punched, leaving only the thread binding pending. The twisted paper string in the upper right corner was added to the preliminary survey in 1995.

## 【研究成果の概要】

2020年から2023年度に、演劇博物館に所蔵された約800点の常磐津節板木（坂川屋旧蔵）を調査した際に、坂川屋の残した印刷在庫が全47箱のダンボールに納められていることを確認した。これらの大半は、出荷前の印刷在庫ゆえ、見た目がまったく変わらぬ1つの印刷物が、数百・数千という莫大な数量で、ほぼ当時の梱包のまま遺っていると考えられる。一度に数百枚を刷り出してそのまま梱包されたもの、それを折って重ねたもの、さらに綴じ穴を開けたもの、表紙をかけたもの／かけていないものなど、刷り出しから製本までの様々な作業の経過が、手に取るようにわかることが、印刷在庫という資料形態の特色である。

今年度は10箱分、約91書目の稽古本在庫を精査し、その中から、彫り・刷りが比較的鮮明な59書目を抜粋して撮影、データ化し、それをもとに、形態の分類や書誌情報を記した仮目録を作成した。なお、同じ書目であるが板木の新旧または刷りの先後が異なる本（いわゆる異版本）を14書目、板木の存在が確認できていない本を37書目、確認することができた。



稽古本「初恋千種の濡事」上巻（お染土手場）の未成品[50393-012] 坂川屋板木[29888-430~436]を刷り出したものか。本文全丁と奥付の丁合を整え、綴じ穴をあけた状態（表紙欠）。出荷前の未成品だが、赤・黒の鉛筆で書き込みがある。坂川屋を訪れた実演家たちが稽古や共演での確認事項等を、手近にあった在庫品にメモ書きしてしまった痕跡であろうか。

This may be an unfinished print of the Sakagawaya woodblock of Volume I of the practice book Hatsukoi Chigusa no Nuregoto (Osome Doteba). The binding holes have been punched (except for the front cover). Although it is unfinished before the shipment, it shows the writing in red and black pencil. These may be traces of performers who visited Sakagawaya and wrote notes on stock items that were close at hand to confirm details for rehearsals or performances.

## 小沢昭一旧蔵資料にみる「日本芸能史」構想についての調査研究——性表現の推移を中心に

研究代表者：鈴木聖子（大阪大学大学院人文学研究科准教授）

研究分担者：武藤大祐（群馬県立女子大学文学部教授）、垣沼絢子（立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員）

### 【研究目的】

小沢昭一旧蔵資料には、新劇俳優の小沢昭一（1929～2012）が出演したラジオ・テレビ・映画・演劇の台本約2500点のほか、音響映像メディア、スクラップブック、草稿、公演パンフレット、写真等が収蔵される。当研究チームの目的は、これらを調査しつつ、小沢が1960～70年代に構想した「日本芸能史」における性に関わる文化の諸相を検討するものである。

### 【研究成果の概要】

2024年4月の研究開始時までには演劇博物館によって小沢昭一旧蔵資料の半分以上が目録化されていたことと、1960年代後半の小沢昭一によるインタビューが録音されたオープンリールテープ資料のデジタル化が進められていたことは、本研究の出発点を大きく前進させた。ユネスコが2025年に向けてMagnetic Tape Alertを発信したように、磁気テープは再生不可能になる危険性があるため、世界のアーカイヴ機関でデジタル化の最優先事項と認識されている。

演劇博物館でデジタル化された音声資料群は、このように諸アーカイヴ機関へのモデル事業としても発信しうる価値をもつが、それだけではなく、本研究の内容に関しても重要な資料的価値を有するものである。主

なオープンリールテープの内容を分析した結果、これらのインタビュー対象者については、小沢が1960年代に大衆紙『内外タイムス』より依頼を受けてインタビューをした人々のうち、初の著作となる『私は河原乞食・考』（三一書房、1969年）のために、「性」と「芸」に関わる人々を再訪したものであることが明らかになった。中には「錦影絵」など希少な上方芸能の保持者たる初代桂南天（1889～1972）へのインタビュー（小沢と桂米朝による）といった、LP『ドキュメント 日本の放浪芸』（ビクター、1971年）へと結びついた録音資料も含まれている。当該資料については書き起こし原稿も発見され、当時のオーラルな世界と文字の世界との差異を炙り出すことができるため、大阪大学の秋冬学期「音楽学演習」（鈴木）及び2月に開催の研究会で検討した。その他の録音資料についてはその対象者の出自が多岐に渡ることから、それぞれの専門家に音声聞いて頂き、ディスカッションをする連携調査を試みている。

この一連の録音資料の歴史的文脈を理解するために、小沢によって制作されたスクラップブック資料の詳細な目録の作成を同時並行して進めている。当該資料は、小沢自らが、日本全国の新聞雑誌に書かれた自分に関する記事を業者に頼んで収集し（取引に関連する文書群が発見された）、それら大量の切り抜きをスクラップした、いわば「エゴサーチ」の集積である。彼が常に自己イメージを世に確実に送り出そうとしていたことを跡付ける重要な資料である。今後はこの目録に他の調査中の新聞雑誌記事やパンフレット・台本・写真を関係づけていくことで、小沢旧蔵資料のデータベース構築を有機的なものにしようと考える。



（左）初代桂南天へのインタビューが録音されたオープンリールテープ（5号）全4本中の1本 [EA00105965]

（右）書き起こし原稿（1960年代後半） [51841]

Open reel tape No. 5 (left) and transcribed manuscript (right) of an interview recording with Katsura Nanten I (late 1960s)

品名	数	単価	合価
新聞記事	32	80	2560
週刊誌記事	5	160	800
雑誌記事			
外国紙誌記事			
スクラップ貼			
送料及配達料			200
合計金額			3560

株式会社 日本資料通信社  
東京都港区南青山2-29-2 5F (TEL: 03-5561-1880)  
（取引銀行） 第一勧業銀行 青山支店 (541-0442)  
三井銀行 霞ヶ関支店 (531-1334)

株式会社日本資料通信社より小沢宛「エゴサーチ」の請求書（1976年5月31日） [51743]

A bill for Ozawa's "ego search"  
(Nippon Shiryo Tsushinsha, 1976)



## 奨励研究

本拠点では2020年度より演劇博物館の若手研究者を中心に今後の本拠点の共同研究の基礎調査を行う「奨励研究」を開始しました。2023年度も4件の研究課題が採択され、多彩な研究が行われました。

2024年度の研究課題として①「小山内薫関係資料の調査研究（熊谷知子）、②「戦後日本の演劇における第二次世界大戦の表象と語り——2025年度早稲田大学演劇博物館企画展に向けて（近藤つぐみ）、③「演劇博物館所蔵中国演芸貴重資料の目録作成（李家橋）、④「戦前～戦中日本のロマンチック・コメディ映画に関する調査研究（具

珉炯）の4件が採択された。各研究課題が学内外の研究者等と協力しながら、多岐にわたる膨大な演劇博物館の資料の調査・考証を進めた。成果の一部は演劇博物館の秋季企画展「築地小劇場100年—新劇の20世紀—」などで発表された。

## 拠点間連携事業

本拠点では、2023年度より、文部科学省より同じく共同利用・共同研究拠点としての認定を受けている京都芸術大学舞台芸術研究センター「舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点」と連携し、様々なイベントを実施しています。

### 共同利用・共同研究拠点連携プロジェクト 「疫病・戦争・災害の時代に—サミュエル・ベケット映画祭2024」 「ベケットの実験的短篇映像 上映&トークの夕べ」

共同利用・共同研究拠点連携プロジェクトの2年目として、今年度は、サミュエル・ベケット（1906～1989）をテーマに、「疫病・戦争・災害の時代に—サミュエル・ベケット映画祭2024」と題して早稲田と京都にて上映イベントを開催した。

早稲田大学では、2024年12月17日に「ベケットの実験的短篇映像 上映&トークの夕べ」と題したイベントを小野記念講堂で開催した。

第一部では、ベケットが脚本を執筆した唯一の映画でバスター・キートン主演の「フィルム」をはじめ、ベケット自身が演出したテレビ作品「クワッド」、さらに「わたしじゃないし」、「プレイ」、「息」という、ベケットの演劇を他の監督が映画化した二次創作とも言える作品3本の計5本の短編映像を上映した。どれも実験的な作品で、アンソニー・ミンゲラやニール・ジョーダンといった名監督やアラン・リックマンやジュリアン・ムーアなどの名優が関わったものである。「ゴドーを待ちながら」や「エンドゲーム」のように「疫病・災害・戦争」とは直接結びつかないかもしれないが、どの作品も私たちの無意識の領域に迫りつつ、私たちが生きる今という時代に呼応しうる作品であった。第二部では、映画監督の七里圭氏、劇作家・演出家で演劇プロジェクト《円盤に乗る派》代表のカゲヤマ気象台氏をお迎えし、岡室美奈子（早稲田大学文学学術院教授）と小崎哲哉（京都芸

術大学大学院芸術研究科教授）両氏が聴き手となって、上映作品を中心にベケットの世界についてアフタートークを行った。アフタートークでは、七里監督、カゲヤマ氏が携わった映画および演劇作品の映像を用いながら、ベケット作品の洗練性（非洗練性）、ベケット作品の俯瞰性、メディアへの志向の方向性や映像の見え方など多岐にわたるテーマで、ベケットの世界について深い議論が交わされた。



「ベケットの実験的短篇映像 上映&トークの夕べ」トークの様子  
左より：岡室美奈子氏、カゲヤマ気象台氏、七里圭氏、小崎哲哉氏  
A scene from the "Beckett's Experimental Short Films:  
An Evening of Screenings and Talks" Talks  
From left: Prof. Okamuro Minako, Mr. Kageyama Kisyoudei,  
Mr. Shichiri Kei, and Prof. Ozaki Tetsuya

## 拠点主催事業

### コロナ禍の演劇に関する共同研究事業

本拠点では、2020年度からのコロナ禍の演劇の動向を調査してきた「特別テーマ研究」の成果を発展させるとともに、広く国内外の演劇、芸術、社会の動向のなかで新たな議論につなげる取り組みを継続しました。

#### シンポジウム

#### チェルフィッチュ「映像演劇」をめぐって～“演劇性”のアップデート

演劇博物館、および本拠点では、新型コロナウイルスの感染拡大が始まった2020年からコロナ禍における演劇文化に関する調査・検討を継続的に行ってきた。その中で、コロナ禍により需要が高まった演劇の映像配信やハイブリッド上演などの新しい演劇の形が受容する側にとってどのように変化したのか、リアルと配信、それぞれの体感や楽しみ方についても議論を重ねてきた。

チェルフィッチュは、近年、スクリーンなどに投影された等身大の役者の映像と観客の想像力によって「演劇」を立ち上げる〈映像演劇〉を探索している。2022年3月初演の『階層』では、奈落と客席という劇場の機構を利用して、観客が移動しながら、舞台上から奈落の底に映し出された役者たちの映像を覗き込むというスタイルを導入した。同年8月初演の『ニュー・イリュージョン』では、舞台と客席という通常の演劇の形式を踏襲しつつ、劇場空間で〈映像演劇〉を「上演」した。こうした作品は、演劇は生身の役者によって演じられ、役者と観客が時間と空間を共有するという、ギリシャ劇以来の演劇の定義を揺るがせ、私たちに映像と演劇の関係を再考させる試みであると言える。これまでのコロナ関連の取り組みの延長として、コロナ禍を経た今、演劇にどのような新たな可能性が生まれているのか、近年、スクリーンなどに投影された等身大の役者の映像と観客の

想像力によって「演劇」を立ち上げる〈映像演劇〉を探索しているチェルフィッチュの実践を通じて検討した。

まず第一部では、チェルフィッチュとともに〈映像演劇〉を立ち上げた映像作家の山田晋平氏が基調講演を行った。講演の中では上述の『階層』や『ニュー・イリュージョン』を中心に、〈映像演劇〉という新しい試みがどのように立ち上がり、作品がどのように創られたかが、豊富な映像を交えて具体的に解説された。第二部のディスカッションには、山田氏のほか、チェルフィッチュ主宰で〈映像演劇〉の作・演出を手がける岡田利規氏、フェスティバル／トーキョーや東京芸術祭のディレクターを長年務め、ドラマトルクでベケット研究者でもある東京藝術大学の長島確氏が登壇し、同じくベケット研究者である早稲田大学演劇博物館前館長の岡室美奈子氏が司会を務めた。ディスカッションの中では、〈映像演劇〉においてフィクションがどのように立ち上がってくるのか、従来の演劇と〈映像演劇〉がどのような点で同じで、どのような点で異なっているのか、などといった論点が取り上げられ、ベケット作品との比較も交えながら活発な議論が交わされた。ギリシャ時代以来、生身の俳優の現前を前提としてきた演劇において〈映像演劇〉が提起する演劇とは何かという問い、そして演劇全般の今後の可能性を検討する機会となった。

なお、本イベントのアーカイブ動画は演劇博物館公式YouTubeチャンネルで公開されている。



シンポジウム 「チェルフィッチュ「映像演劇」をめぐって～“演劇性”のアップデート」ディスカッションの様子

左より：岡室美奈子氏、岡田利規氏、山田晋平氏、長島確氏

A scene from the symposium “chelfitsch’s EIZO-Theater: Updating ‘Theatricality’”

From left: Prof. Okamura Minako, Mr. Okada Toshiki, Mr. Yamada Shinpei, and Mr. Nagashima Kaku



## 国立映画アーカイブとの共催事業

本拠点では、2018年度より行っている演劇博物館所蔵のサイレント映画を用いたかつての多彩な上映スタイルを「再現」する試みを、今年度より国立映画アーカイブとの共催事業として発展させました。

### ワークショップ

#### 「映画と義太夫——旧劇映画の声と音」

サイレント時代の日本では弁士の語りだけでなく多彩な声の文化が映画上映を演出していた。当拠点は2018年度以来、演劇博物館所蔵のサイレント映画を用い、かつての多彩な上映スタイルを「再現」する試みをおこなっている。今年度は、国立映画アーカイブとの共催事業に発展させ、義太夫入りの上映に光をあてた。

本イベントは、演劇博物館所蔵の『朝顔日記』といった「旧劇映画」の義太夫入り上映を実現するための考証プロセスをワークショップとして公開した。

第一部では、早稲田大学総合人文科学研究センター一次席研究員の柴田康太郎氏が、「サイレント時代の映画館と義太夫：九島資料を手掛かりに」と題した発表を行った。発表はサイレント時代の映画館における義太夫出語りの歴史とその広がりについて具体的な事例から示すもので、とりわけ、大正期の札幌の映画館において義太夫出語り入り上

映が盛んに行われていた実態が演劇博物館所蔵の九島興行関連資料を通じて紹介された。発表に続いては演劇博物館の館長である児玉竜一による作品紹介の後、同館所蔵の『朝顔日記』（1909年）の無音上映が行われた。第二部では、国立映画アーカイブ主任研究員の富田美香氏が「資料から見る“義太夫出語り”旧劇映画の魅力」と題して、『五郎正宗孝子伝』や『一休和尚と野晒悟助』といった非歌舞伎由来の旧劇映画における義太夫場面について紹介した。発表の後には国立映画アーカイブ所蔵の『旧劇 太功記十段目 尼ヶ崎の場』（1908年）の弁士説明版の上映が行われた。このバージョンは1962年に大倉貢が行った出語り上映を記録した珍しいものであった。そして上映に続いては、義太夫三味線演奏者の鶴澤津賀寿氏をお招きし、児玉竜一館長と対談を行った。対談の中では、鶴澤氏ご自身の演奏による「尼ヶ崎」の音源を『旧劇 太功記十段目 尼ヶ崎の場』のサイレント版に合わせて編集したバージョンの大変貴重な上映も行われ、旧劇映画の義太夫入り上映の再現に向けた可能性が開かれた。

## 海外の大学研究機関との連携事業

本拠点では新型コロナウイルスの感染拡大以降もオンラインツールを活用しつつ海外の機関との研究交流を積極的に行っており、今年度も充実した成果をあげました。

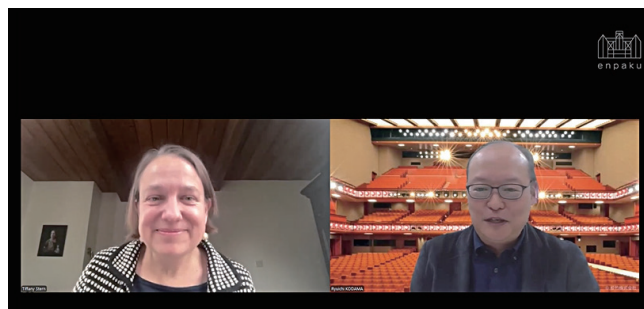
### 日英対談

#### 歌舞伎とシェイクスピア上演の過去・現在・未来 第二弾

日本で最初にシェイクスピアの全作品を翻訳した坪内逍遙により設立された演劇博物館では、シェイクスピア研究の世界的拠点であるシェイクスピア研究所を擁するイギリスのバーミンガム大学と研究協力体制を築いてきた。昨年度に引き続き、シェイクスピア研究所教授のティファニー・スターン氏をお招きして日英対談「歌舞伎とシェイクスピア上演の過去・現在・未来 第二弾」を実施した（2024年11月12日、オンライン、非公開）。対談の相手は早稲田大学文学学術院教授・演劇博物館長で歌舞伎を専門とする児玉竜一が務めた。

本企画の目的は、シェイクスピア劇と歌舞伎研究において、上演という「残らないもの」に如何にアプローチし再現し得るか、お互いの研究に資する情報交換を行うことで、将来的な日英演劇比較研究の基盤づくりを目指すことである。両分野においてどのような資料が残っているのか、

それらからどのような上演や資料を復元・再現し得るのか、戯曲そのものについてではなく、かつてあったはずのもの（上演）をどうしたら再現、比較し得るかの情報交換を行う。対談第二弾となる今回は、①演技という、過去の演劇を考える上で最も重要でありながら、最も実証にくいものを、どのように探るか。そのために、どのような資料を動員する



日英対談「歌舞伎とシェイクスピア上演の過去・現在・未来 第二弾」の様子  
左より：ティファニー・スターン教授、児玉竜一館長

A scene from Japan-UK dialog “Kabuki and Shakespeare in Performance: Past, Present, and Future - Part II”  
From left: Prof. Tiffany Stern and Prof. Kodama Ryuichi

か、②過去を知るために、現在の演劇をどのように参照するべきか。あるいは、参照されるべき演劇とはどのようなものか、③観客という、非常に興味深いがつかみどころのない存在をどのように研究すべきか、④英国にはどの時代（時

期）から絵画資料、写真資料が豊富に存在するのか等について対談する。対談の採録は本拠点のウェブサイトにて公開する予定である。

## くずし字判読支援事業

本拠点では2016年度以来、TOPPAN株式会社との共同で「くずし字判読支援事業」を行っています。

演劇博物館は江戸時代の貴重な浄瑠璃丸本の充実したコレクションを誇るが、これらの資料は漢字をくずした「くずし字」の中でも独特な書体で描かれているために判読が困難である。しかし資料自体は古典芸能研究においてきわめて有用であるため、それらの資料を若手や海外の研究者の利用にも広く供するという目的のもと、本事業では「くずし字OCR」の構築作業を行ってきた。

今年度は、「くずし字OCR」を活用した総合的古典籍データベースを拡充するため、過年度に作成した浄瑠璃丸本「菅原伝授手習鑑」の文字譜データベースを新たに作成、また、これまでに公開した字形データセットの内容を精査し、より正確なデータベース公開に向けて修正、更新を実施した。これらの成果は本拠点ウェブサイトおよび早稲田大学文化資源データベースに公開予定である。

## 演劇・映像資料の利活用を図る事業

本拠点では、演劇博物館の貴重かつ多彩な所蔵資料を保全しつつ広く一般に供するため、資料のデジタル化とデータベース化を積極的に進めています。

本拠点では、演劇博物館の所蔵資料のデジタル化を積極的に進め、その資料の利活用方法の可能性を広げる取り組みを行っている。今年度は、演劇博物館の所蔵資料から駒田好洋旧蔵資料をはじめ、小沢昭一や田邊孝治氏旧蔵の音声資料などを中心にデジタル化を行った。これらのデジタル化された資料は、その資料を研究対象とする共同

研究チームに供され、研究活動の推進に大きく貢献した。また、過去にデジタル化したサイレント映画などの映像資料を活用する事業を今年度も継続し、今年度は国立映画アーカイブとの共催事業に発展させた（詳細は13ページ参照）。





# Mission and Vision

## Leader of the Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts

### Kodama Ryuichi

The Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, which is operated by the Theatre Museum, has been in operation since AY2009 as a Joint Usage and Research Center, a status granted by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT). The unique feature of this Center is its collaboration with its parent organization, the Theatre Museum, having a collection of more than one million materials, to contribute to joint research on valuable unreleased/undisclosed materials that have not been adequately put to academic use.

Specifically, through four types of joint research projects, the Center promotes multifaceted, advanced research activities by diverse researchers in fields other than theater and film studies as well. First, Principal Research involves joint research projects on themes and materials proposed by the Center. Selected Research comprises joint research projects that accept public applications to conduct research on the Theatre Museum's unreleased/undisclosed materials. Encouragement Research focuses on young researchers affiliated with the Theatre Museum, who carry out studies on materials as the foundation for future joint research. Finally, Organized Projects include joint research projects led by the Center in collaboration with research institutions and corporations in Japan and abroad.

AY2024 marked the first academic year of the joint research teams' activities, which were approved for two years. The following projects were adopted: three Principal Research projects on the Kubo Sakae-related Materials, the Kurabayashi Seiichiro Collection, and movie theater flyers; six Selected Research projects on the Okamoto Kido Collection, the Diary of Ichikawa Danjuro Hakuen II, the Dizer Collection (scripts from Kyushu-area theatrical productions censored by the SCAP [GHQ]), the Tanabe Koji Collection, the Sakagawaya Collection related to the original Tokiwazu-bushi, and the Ozawa Shoichi Collection. Each joint research team initiated its research activities.

Four new research projects were selected for the Encouragement Research program this year. Research and investigation of the Theatre Museum's collection were conducted on various themes, including Osanai Kaoru's theatrical activities, representations of World War II in postwar Japanese theater, valuable Chinese performing arts materials such as the works of the Chaozhou Opera in

Guangdong Province, and Japanese romantic comedy films from prewar to wartime. Organized Projects were developed around three pillars: (1) an examination of the state of performing arts after the COVID-19 pandemic, (2) close collaboration with corporations and research institutions in Japan and abroad, and (3) exploration of potential digital resources and technology.

In relation to (1), the "chelfitsch's EIZO-Theater: Updating Theatricality" symposium was held in May. The symposium examined new possibilities for theater after the COVID-19 pandemic through the practice of chelfitsch. Regarding (2), this academic year, the Center's attempt to "reconstruct" the various screening styles of the past using silent films from the Theatre Museum's collection, which has been ongoing since AY2018, was developed as a joint project with the National Film Archive Japan (NFAJ). In May, a workshop was held to discuss the research process for screening of "*kyugeki eiga* (old theatrical films)" from the Theatre Museum's collection, such as *Asagao Nikki*, with *gidayu* accompaniment. In addition, in the International Workshop on deciphering *kuzushiji*, which has been conducted since 2016 with TOPPAN Inc., the Center revised the character style dataset created in previous academic years and created a database of character notations in the authenticated version of "*Sugawara Denju Tenarai Kagami*" to enhance the content and accuracy of the database. As a collaborative project among Joint Usage and Research Centers, "In Times of Epidemic, War and Disaster: Samuel Beckett Film Festival 2024" was held jointly with the Interdisciplinary Research Center for Performing Arts at the Kyoto University of the Arts, and was well received. In addition, the Center is conducting collaborative projects with the University of Birmingham and Portland State University and is continuing to promote international research exchanges. Regarding (3), the Center is actively promoting the digitization of audio materials such as open-reel tapes and cassette tapes to preserve and share these valuable materials.

The Center will continue to make use of abundant research materials and digital technologies possessed by the Theatre Museum to serve as a hub for joint research in the field. We appreciate your ongoing support and cooperation.

## ■ Report on principal research findings, fiscal 2024

### ○ Principal research

The principal research involves a joint research project on the theme proposed by the Center, which researchers were encouraged to participate in. The titles and affiliations of the project members shown below are as of the start of the fiscal year.

#### Principal research

1

## Survey of Kubo Sakae Materials

Principal Researcher: Abe Yukako (Professor, Faculty of Arts and Letters, Kyoritsu Women's University)

Collaborative Researchers: Akai Kimi (Associate Professor, Graduate School of Arts and Letters, Tohoku University), Kumagai Tomoko (Research Assistant, Theatre Museum, Waseda University)

### Research Objectives

This study investigates, transcribes, and examines unorganized and unpublished materials in the Theatre Museum's Kubo Sakae Collection. Kubo Sakae (1900-1958) was a playwright and director who led the world of Japanese *shingeki* from prewar to postwar Japan. The project particularly focuses on his relationship with Tsukiji Shogekijo. In 1926, Kubo entered the literary department of Tsukiji Shogekijo and studied theater under Osanai Kaoru and Hijikata Yoshi; after Osanai's death, he produced a series of masterpieces. Kubo's experiences at Tsukiji Shogekijo and the influence of Osanai were significant in his creative activities, and we believe that we can solidify the foundation for basic research on Kubo Sakae based on primary sources by examining these experiences.

### Summary of Research

We would like to review the materials covered by the research team. Kubo Sakae was involved in the activities and founding of various *shingeki* theater troupes, from Tsukiji Shogekijo to Shinkyo Gekidan and the Mingei Theatre Company. He was a writer who occupied a major position in the *shingeki* world before and after World War II. He wrote many works that have been repeatedly performed to this day, including *Goryokaku chi-sho* (first performed in 1933), *Kazan Baichi* (first performed in 1938), and *Ringoen Nikki* (first performed in 1947). He also directed plays like Shimazaki Toson's *Yoake Mae* (first performed in 1934).

Although it is essential to discuss the role of Kubo Sakae in the history of Japanese *shingeki* and Japanese realist theater, we can hardly say that research about him is currently in progress.

The Kubo Sakae materials in the Theatre Museum Collection fill more than 40 cardboard boxes and were donated by Kubo's adopted daughter, Kubo Masa. The materials include a wide variety of diaries, drafts, memos, letters, household accounts, production notes, photographs, programs, flyers, and open-reel tapes, and are largely unorganized.

This academic year, much time was devoted to sorting and organizing various mixed materials. After classification, the materials were cataloged focusing on manuscripts, notebooks, and letters in Kubo Sakae's handwriting, and books formerly owned by him were identified as well. Overall, Kubo's materials have deteriorated significantly and many of them need to be digitized. Due to the large volume of materials, we are considering digitization of the items first, starting with those in good condition, using a scanner.

By organizing the materials, we have discovered notes written by Kubo for the biography *Osanai Kaoru* (1947), correspondence with Murayama Yomoyoshi that has not been published in Kubo's complete works, and handwritten manuscripts of his major works. All of these are valuable primary sources. In particular, we believe that the materials on Osanai Kaoru are very important in examining the relationship between Kubo and Tsukiji Shogekijo.

This year (2024) marks the 100th anniversary of the opening of Tsukiji Shogekijo, and all team members have curated exhibitions related to the theater. Abe curated the exhibition "The young people who launched a passion for theater: 100 years of Tsukiji Shogekijo" (Kyoritsu Women's University 1st floor lobby, September 18-October 9, 2024). Akai and Kumagai curated "100 years of Tsukiji Shogekijo: 20th century *shingeki*" (Waseda University Theatre Museum, 1st floor, Nakamura Utaemon VI Memorial Special Exhibition Room and 2nd floor, Special Exhibition Rooms I and II, October 3, 2024-January 19, 2025).

The latter exhibition displayed a number of materials related to Kubo Sakae, including a memo on the writing of *Osanai Kaoru* discovered while organizing the materials. The results of the research team were put to good use in the exhibition, and the importance of Kubo Sakae in the development of Tsukiji Shogekijo and subsequent *shingeki* was made even clearer through the presentation of the exhibition in its full historical context.



## Research on Postwar *Shingeki* with a Focus on the Kurabayashi Seiichiro Collection

Principal Researcher: Goto Ryuki (Research Fellow, The Edogawa Rampo Memorial Center for Popular Culture Studies, Rikkyo University)

Collaborative Researchers: Kamiyama Akira (Emeritus Professor, School of Arts and Letters, Meiji University), Kodama Ryuichi (Professor, Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University), Yoneya Naoko (Cultural policy and arts management advisor), Fujiya Keiko (Librarian, Waseda University)

### Research Objectives

Kurabayashi Seiichiro (1912-2000) joined the Haiyu-za Gekidan Theater Company in 1946, shortly after Japan's defeat in World War II. He founded the Haiyu-za Theater in 1956 and was appointed its CEO in 1981. In 1965, he was instrumental in establishing Japan's first unified body of performance artists, the Japan Council of Performers Rights & Performing Arts Organizations (*Geidankyo*). This organization significantly influenced the protection of performers' rights, encouragement of cultural activities, and policy advocacy in the performing arts.

This study aims to reassess Kurabayashi Seiichiro as a theater producer through research and examination of diaries, scrapbooks, memos, notebooks, letters, and other materials in the Kurabayashi Seiichiro Collection, and to lay the foundation for basic research on postwar *shingeki*. The importance of the "theater producer," defined by Kurabayashi himself as "existing between the creative organization and the audience, and playing an important role in objectively and correctly understanding the positions and ideas of both parties and communicating them to each other" (*The Theatre Producer*), cannot be overlooked when considering audience theory in the theater. However, producers have not yet been considered as a subject of research. By clarifying Kurabayashi's achievements, this project aims to measure the influence of the producers who actually managed theater venues and put on performances, to open up perspectives on theatrical (theater historical) research not limited to the viewpoints of writers, directors, actors, and other creatives, and to clarify the multifaceted nature of postwar *shingeki* performances, among others.

### Summary of Research

The materials in the Kurabayashi Seiichiro Collection accepted by the Theatre Museum in AY2020 comprised 3,004 items (387 books, 835 magazines, and 1,782 museum artifacts).

The members of the project team have been organizing the Kurabayashi materials in the Center's Principal research project "Research on the Kurabayashi Seiichiro materials" (AY2022-23) and have created a simple inventory; however, they have not yet reached the stage of detailed research and investigation of individual materi-

als and have not yet examined the relationship between the various materials.

Among the materials used in this academic year, the principal researcher and collaborative researchers (Kamiyama, Kodama, and Fujiya) continued transcribing the diaries (79 volumes in total) written by Kurabayashi from June 1947 to March 2000. This endeavor built on the results of Grant-in-Aid for Scientific Research (C) "Basic Study of the Postwar *Shingeki* (new drama) Based on Research and Historical Evidence of Seiichiro Kurabayashi Document" (Principal Researcher: Goto Ryuki, 21K00199, AY2021-2023), which involved the transcription of diaries written by Kurabayashi during the Occupation period.

Through transcription and checking by the project members, we have completed the transcription of the diaries written by Kurabayashi from 1946 to 1952. We are preparing to publish these documents in the next academic year and hope to make them available to the public as materials contributing to the study of postwar *shingeki* (theater).

We also had an opportunity to interview Iwasaki Kaneko, who joined the Haiyu-za Gekidan Theater Company as a research student shortly after Japan's defeat in World War II and is now the company's representative. The contents of this interview were published in Goto Ryuki, "Seventy Years of Haiyu-za: The Changing Town of Roppongi and the Closing of the Theater" (*Tokyo jin*, No. 486, December 2024).

Future prospects will be discussed below. As aforementioned, in the next academic year, we plan to publish the results of the transcription of diaries written by Kurabayashi during the Occupation period, with explanatory notes and other information by the project members. We would also like to proceed with the transcription of the diaries he wrote after that time. The diaries written after the Occupation period date back to the construction and opening of the Haiyu-za Theater. In light of the theater's closing in 2025, it is assumed that the results obtained through research and transcription of Kurabayashi's diaries will be significant. Furthermore, we plan to conduct research on the dynamics of postwar *shingeki*, including materials other than diaries.

## Research on Prewar Film Screenings Using Film-Related Materials

Principal Researcher: Okada Hidenori (Curator, National Film Archive of Japan)

Collaborative Researchers: Kamiya Makiko (Part-time Lecturer, Musashino Art University), Shibata Kotaro (Junior Research Fellow, Research Institute for Letters, Arts and Sciences, Waseda University), Shirai Fumito (Associate Professor, Faculty of Business and Commerce, Keio University)

### Research Objectives

The purpose of this study is to examine various aspects of film exhibition, including live performances, at movie theaters in prewar Japan by cataloging and analyzing movie theater flyers in the Theatre Museum Collection. Building on the results of previous research projects conducted by the team, namely the Selected Research project “A Basic Research on Silent Film Screenings Using Promotional Movie Materials” (AY2020-2021) and the Principal Research project “Research and Study Toward the Utilization of Film-related Materials Centered on Theater Flyers” (AY2022-2023), this project will add the Theatre Museum’s Komada Koyo Collection to the scope of research to provide a more detailed understanding of film exhibition in the early silent film era.

### Summary of Research

This academic year, while focusing on publishing the results of the team’s research activities that began in AY2020, the team began cataloging the scrapbooks in the Theatre Museum’s Komada Koyo Collection, introducing a new research subject. Additionally, they digitized a silent film from the Kobe Planet Film Archive’s collection with support from the Yanai Initiative and the efforts of Tokyo Ko-on. The film is scheduled to be shown as a “reconstructed” screening with a benshi’s narration and musical accompaniment at a public research meeting in 2025.

In May 2024, a research meeting was held at the National Film Archive of Japan (NFAJ) with film screenings of rare films produced during the transition to talkies. At the research meeting, Kamiya Makiko (collaborative researcher) gave a presentation entitled “Makino Talkie Activities and Works,” and Shibata Kotaro (collaborative researcher) gave a presentation entitled “The Intersection of Japanese Cinema and

Storytelling.” The presentations were followed by a discussion with the participant Shirai Fumito (collaborative researcher) and guests Kyotani Yoshinori (Gakushuin University) and Nishizawa Shunsuke (Aoyama Gakuin University). In December 2024, Shibata and Kamiya interviewed Ueda Manabu (Kobe Gakuin University), who was involved in organizing the Komada Koyo Collection at the Theatre Museum.

As part of our research dissemination efforts, Shibata participated as a specialist in *The Art of the Benshi 2024 World Tour*, a project to screen silent films in four U.S. cities and at Waseda University in April 2024 (organized by the UCLA-Waseda Yanai Initiative, co-sponsored by UCLA Film & Television Archives, Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, Theatre Museum, Waseda University and in cooperation with NFAJ, Shochiku Co. Ltd., and the Theatre Museum, Waseda University). As a part of this initiative, a public lecture entitled “The World of the Benshi: Lecture and Demonstration,” was held at JAPAN HOUSE Los Angeles. At this event, Shibata, Kamiya, and Shirai gave lectures on “The Voices of Benshi in Japan and Beyond,” “The ‘Modernity’ of Japanese Cinema in the 1910s and 1920s,” and “Silent Film Music Across the Pacific,” respectively. This was followed by a live performance of Kataoka Ichiro (benshi), who provided narration for the longest version of *Blood Spattered Takadanobaba* (Nikkatsu, 1928, directed by Ito Daisuke). The event concluded with an audience Q&A session, facilitated by Michael Emmerich (UCLA), who led the event as director of the Yanai Initiative. On January 27, 2025, James Doering (Randolph-Macon College) and his students held a workshop on the sound culture of prewar Japanese films entitled “Exploring the Power of Voice & Music in Japanese Silent Cinema” at the Theatre Museum.



○ Selected research

The selected research consists of joint research projects derived from the reviewed proposals, which aim to promote the effective use of the Theatre Museum's collections. The Center provides a venue and materials for these joint research projects. The titles and affiliations of the project members shown below are as of the start of the fiscal year.

Selected research

1

## Basic Research on the Okamoto Kido Collection

Principal Researcher: Yasuko Yokoyama (Professor, Department of Advances Sciences, Faculty of Science and Engineering, Hosei University)

Collaborative Researchers: Higashi Masao (Literary critic, anthologist), Komatsu Shoko (Professor, Faculty of Letters, Arts, and Sciences, Waseda University), Suzuki Yusaku (Specially-appointed assistant professor at the Center for Modern Kagoshima Studies, Faculty of Law, Economics and Humanities, Kagoshima University), Hara Tatsukichi (Curator, Setagaya Literary Museum), Matsuda Shohei (Fixed-term assistant professor, Faculty of Letters, Otani University), Kensuke Wakisaka (Gakushuin Boys' Senior High School), Katsukura Ai (Nagoya City Higashigaoka Elementary School)

### Research Objectives

The purpose of this study is to conduct basic research and analysis of materials in the Okamoto Kido Collection. It was 150th birth anniversary of Okamoto Kido (1872-1939) in the year 2022, who left a significant mark in the fields of theater and literature. Kido was an active writer in a variety of fields, including plays, drama reviews, novels, essays, and translations. In recent years, he has attracted attention not only in the research fields of modern drama and modern literature but also in diverse fields such as the study of ghosts, ghost stories, and *yokai*. This study focuses on Okamoto's unpublished and untranscribed diaries and aims to digitize and transcribe them. We believe that these materials are first-rate resources for understanding the later life of the writer Okamoto Kido and that reprinting them and making them widely available will provide.

### Summary of Research

#### ○ Digitization of related materials

The Theatre Museum houses Kido's handwritten diaries from July 1923 to December 1938 (the diaries from October to December 1938 were written by Okamoto Kyoichi). The diaries are written vertically in a total of 30 notebooks. Kido lost many of his books and previous diaries in the Great Kanto Earthquake. However, he found a diary he had been writing in the luggage that he brought with him at the time of the disaster and decided to continue writing it. In the 16 years leading up to his death, he kept a detailed account of the day's weather, temperature, activities, work progress, and visitors.

The diaries from 1923 to 1930 were transcribed and published by Okamoto Kyoichi under the titles *Okamoto Kido Nikki* and *Okamoto Kido Nikki Zoku* (Seiabo). However, the diaries of remaining eight years, from 1931 to 1938, have not been published or transcribed. The team will transcribe the unpublished section of the diaries. Entire diaries have been digitized with the

intention of making images of full diaries available online in the future.

In addition to the diaries, the following two documents have been digitized. Okamoto Kido's works were also performed abroad, and a document issued by the Japanese Embassy in France to Kido for permission to perform *Shuzenji Monogatari* at the Théâtre de l'Odéon in Paris in June 1927 is under the Theatre Museum's possession. This is a concrete document of prewar overseas performances and is considered an important source to study the wide reception of Kido's works.

An exhibition in memory of Okamoto Kido was held at the Theatre Museum from March 14, 1939, soon after his death, and a commemorative lecture was held on March 25 of the same year. Ikeda Daigo, Hamamura Yonezo, Oka Onitaro, Kimura Kinka, Kawamura Karyo, Tamura Nishio, Kawatake Shigetoshi, and others took the stage to talk about Kido, and a stenographic transcript of their speeches is in the possession of the Theatre Museum. These two documents will also be transcribed and made available to the public in the future.

#### ○ Transcription status of the diaries

This academic year, the diary entries from January 1931 to January 1933 were transcribed. The diaries from this period show Kido's vigorous writing activities in his later years and his efforts to nurture his successors. They also carefully describe Kido's daily life as an urban dweller, proving to be a valuable source for the history of social customs. By the end of the academic year, two years of transcribed diaries, from January 1931 to December 1932, will be available online, along with images of the materials. To achieve our objectives, we have increased the number of research collaborators during the academic year and are diligently working to make the information publicly available. We are also considering holding a public symposium and workshop in the coming academic year.

## Literary Circles of the Mid-Edo Period, Through Diaries of *Kabuki* Actors

Principal Researcher: Björk, Tove (Professor, Graduate School of Humanities and Social Sciences, Saitama University)

Collaborative Researchers: Inaba Yusuke (Associate Professor, Faculty of Representational Studies, Wako University), Hioki Takayuki (Associate Professor, School of Information and Communication, Meiji University)

### Research Objectives

Based on the “Hakuen Diary (*Hakuen nikki*)” of Ichikawa Danjuro II, this study aims to (1) examine the provenance of the Hakuen Diary and (2) investigate the literary circles of the mid-Edo period, focusing on *kabuki* performers. The Hakuen Diary was copied, along with the diary book “Persimmon Covers (*Kaki byoshi*),” by the attending physician of the *kyōka* poet Shikatsubeno Magao and his son (the original diary of Danjuro II was destroyed by fire in the early 19th century). The Hakuen Diary, constitutes an important document as a record of the daily lives of *kabuki* performers in the mid-Edo period as well as the literary sphere in which they operated.

With the diary as a starting point, this study’s intent is to clarify the Kyōho-era *kabuki* actors’ environment and their connections to *haikai* poets and other literati.

### Summary of Research

There are three main research results of this academic year, the first of which was the continued annotation and commentary of the diaries. Principal researcher Björk continued to write annotations of the diaries of Ichikawa Danjuro II, publishing Part 8, in ‘Saitama University Faculty of Liberal Arts Review (*Saitama Daigaku Kyōyo Gakubu Kiyō*)’ Vol. 60, No. 1, and Part 9 in Vol. 60, No. 2 of the same journal. These sections of the diary cover the 8th-18th and 19th-24th days of the 6th month of the 19th year of the Kyōho era (1734). Danjuro II spent time with his wife Osai (pen name: Suisen) and their children at their villa in Meguro, visited the Shinagawa amusements quarters with *haikai* poets Fukagawa Kōju I and II and Ichimura Uzaemon IX (pen name: Kako, head of the Ichimura-za theater) (8th day 6th month), listened to a sermon by Yutenji temple abbot Yuten II based on his experience of watching *kabuki* plays (19th day 6th month), and discussed the world of *bon-kyōgen* with *kyōgen* performer Tsuchi Jihei II (pen name: Eiko) (13th day 6th month) during that summer vacation. These diary records reveal the specific ways in which *kabuki* actors and Edo literati, as well as priests of the Pure Land sect, interacted with each other in their daily lives. The second, was the continued annotation of poems 26 through 50 of the “Commanding Chariot (*Shinanshano*)” 100-poem sequence in the “Haikai Points by Teisa (*Teisa Ten Haikaijo*)” held by the University of Tokyo Library Shachiku Collection. This document concretely shows the relationships between the *kabuki* actors and *haikai* poets who also appear in the Hakuen Diary. The analyzed document was written on the 14th day of the 12th month, 1728, by Toshima Kafu (the *haikai* poet also known as Yukido) 100-Poem Memorial Sequence Group; the authors included the *kabuki* actors Ichikawa Danjuro II (Sansho) and Nakamura Shichisaburo

II (Shocho), the playwrights Murase Genshiro (Gosen), Nakamura Seizaburo II (Tokyo), and Eda Yaichi (Fuhyaku), Rigo the doorman of the Nakamura-za theater, and patrons such as Oguchiya Jibei (Gyō’u), ranked as the number one big spender in Edo and thought by some to be the model for Danjuro II’s role character Sukeroku. Some of the poems hint at contemporary productions and actors’ critiques of plays like Sukeroku and Dojoji, further clarifying the intimate connections between *kabuki* and the world of *haikai*. This investigation was led by research collaborator Inaba Yusuke, with principal researcher Björk participating. The commentary on poems 26 through 50 was published in *Studies in Dramatic Art* Vol. 48 with Inaba Yusuke, Ogihara Daichi, Kobayashi Toshiki, Liu Xinja and Björk Tove as coauthors. The third research achievement was an invited lecture on the relationship between amateur *kabuki* performances at *daimyo* residences and the *kabuki* world as seen in the diary of Yanagisawa Nobutoki. The lecture was entitled “The World of *Enyu Nikki: Kabuki* Performances and *Kyōgen* Performers at Yanagisawa Nobutoki’s Residence” and was given at the Japanese Society for History of the Performing Arts Research.

The invited lecture, “The World of *Enyu Nikki: Kabuki* Performances and *Kyōgen* Performers at Yanagisawa Nobutoki’s Residence (*Enyu nikki no Sekai – Yanagisawa Nobutoki tei no Okyōgenshi*),” was presented at the meeting of the Japanese Society for History of the Performing Arts Research held in December in Tokyo. Björk analyzed the records of two *kabuki* performances hosted by Nobutoki at his Somei Residence in the 6th and 9th months of the 2nd year of the An’ei era. From these records, we know that Nobutoki himself had his retainers and maids copy scenes from Nakamura Nakazo I, Iwai Hanshiro IV, and Ichikawa Danjuro IV, who were popular actors in Edo at the time, and combined them with a plot borrowed from Kamigata *yoruri* books to create his new works. In addition, his secondary wife Oryu probably played multiple leading roles in these performances, indicating that Nobutoki’s household may have been fully involved. It was also found that during the preparation of the performance, the ladies of the residence would borrow props, wigs, and other items from Nakazo I to use on stage through the Matsuya teahouse at the Nakamura-za theater where Nakazo worked. This indicates that the *kabuki* world supported these patrons’ interest in *kabuki* and was intimately involved with them.

Mentioned above are the three main outcomes of this study for AY2024. Future plans include continuing the clarification of Edo literary circles through the specific relationships between *kabuki* actors, Edo literati, poets, and so on, as depicted in the diaries of Danjuro II.



## Empirical Research on Regional Theater Under the GHQ (SCAP) Occupation: Focusing on the Kyushu Area

Principal Researcher: Ogawa Chikashi (Professor, Faculty of Childhood Education, Yokohama Soei University)

Collaborative Researchers: Sugawa Wataru (Associate Professor, Faculty of Humanities, Fukuoka Jo Gakuin University), Hatanaka Sayuri (Part-time Lecturer, Osaka University)

### Research Objectives

The objective of this study is to clarify the characteristics of the theater produced immediately after World War II in the Kyushu area. This is accomplished through an analysis of the Dizer Collection (scripts from Kyushu-area theatrical productions censored by the SCAP [GHQ]).

### Summary of Research

This academic year, 27 scripts from the Dizer Collection were digitized. The results of research up to this academic year were presented at the Japan Society for Theatre Research's panel "Empirical Research on Regional Theater Under the GHQ (SCAP) Occupation: Focusing on the Kyushu Area" held on Sunday, December 1, 2024 at Tokyo Keizai University. The research results of each of the collaborative researchers are outlined below.

Regarding amateur theater, workplace theater, and union theater, information written on the scripts, such as company names and authors, was referenced against information from theatrical magazines and the writings of those involved to pinpoint the characteristics of each company as far as possible. We also investigated the actual status of submissions for censorship of theatrical activities in the region.

With regard to theater companies in Kumamoto Prefecture, we proceeded to elucidate the activities of the Bungei-za Theater Company, which supported the beginnings of Kumamoto *shingeki* in the postwar period. The leader of the company, Shimokawa Enji (1916-1991), studied playwriting at Moulin Rouge before the war and has been confirmed to have written 15 scripts for the company's performances. In studies like *Karamatsu no kaze* (Wind in the Pines), *Mizukara no tochi* (Our Own Land), and *Furusato no kaze* (Hometown Wind), Shimokawa depicted the struggles of people left behind in the postwar reforms, with demobilized

soldiers, fiancés, and agrarian reform as subjects. His work depicts the great divide between those who sought to adapt to new values and those who were bound by the old ones. After the end of the Occupation, Shimokawa published a play, *Den'en Kyoshikyoku* (Rural Rhapsody) (1955), which reconstructed these studies, highlighting the divisiveness and violence of postwar society while offering an in-depth perspective on the American occupation policy. Shimokawa's works from the Occupation period had a pioneering significance that anticipated the subsequent era, unlike the works celebrating new values created by the all-female theater company Orion-za, which was active in Kumamoto during the same period. The results of these studies were reported at the August meeting of the Society for the Study of Modern and Contemporary Theatre Studies and the December meeting of the Japan Society for Theatre Research.

Regarding popular theater genres, we have learned that they include a number of plays that are identical in content to the titles performed by popular theater troupes in the present day or that are considered to have their roots in the genre. It is groundbreaking to be able to provide evidence that same content have been performed from the Occupation to the present day in popular theater, for which few scripts have survived outside of the Dizer Collection. Moreover, we examined the content of the scripts (66 total/58 titles) submitted by Higuchi Jiro I (1906-1970) and his theater company, which became popular in the Kyushu area before and after World War II. Many plays were period dramas, such as *Meigetsu Akagiyama* (Full Moon Over Mt. Akagi). There were also *rokyoku* dramas, modern dramas starring demobilized soldiers, and absurdist dramas. This reveals that the popular theater companies of the time were devising various types of performance to win the hearts of audiences. These findings were presented at the Japan Society for Theatre Research in December.

## Research on *Kodan* Materials in the Tanabe Koji Collection

Principal Researcher: Imaoka Kentaro (Professor, College of Art and Design, Musashino Art University)

Collaborative Researchers: Sato Katsura (Professor, College of Literature, Aoyama Gakuin University), Sato Yukiko (Professor, Faculty of Letters, The University of Tokyo), Takamatsu Hisao (Professor, Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University), Takiguchi Masahito (Lecturer, Keisen University), Kanno Shunsuke (Graduate Student, The University of Tokyo)

### Research Objectives

The late Tanabe Koji was a longtime editor at Shinchosha. While working in that role, he conducted research on *kodan* storytelling and edited and published the magazine *Kodan Kenkyu* (Kodan Research) to introduce materials and publish his research findings. The purpose of this study is to elucidate the full extent of the materials related to *kodan* in the Tanabe Collection which was donated to the Waseda University Theatre Museum.

This study will begin with a full investigation and digitization of the audio materials, followed by cataloging of the recorded performances. Currently, a simplified catalog of audio materials has been created, but an accurate catalog that matches the contents has yet to be produced. Compiling a detailed catalog and matching the materials with current performances are urgent tasks.

### Summary of Research

#### ○ Features of the materials

The materials can be roughly divided into the following five categories:

- ① Audio materials in the form of commercially available records, cassette tapes, CDs, etc., of *kodan* performances.
- ② Audio materials in the form of cassette tapes of *kodan* performances which are believed to have been recorded by Tanabe himself from radio broadcasts.
- ③ Audio materials in the form of cassette tapes of *kodan* performances which are believed to be recordings of oral performances at meetings such as Shinshin Goninkai (The Rising Five) and Shunen Goninkai (The Excellent Five), which Tanabe hosted for many years.
- ④ Audio materials in the form of cassette tapes on the origins, stories, and performances of *kodan* performers, which are thought to have been recorded by Tanabe himself during his interviews.
- ⑤ Audio materials in the form of commercially available cassette tapes and CDs on *rakugo*,

imitative voice, and other topics related to *kodan*.

The collection also includes a small number of visual materials on 8 mm video and VHS.

#### ○ Significance of the materials

Among the wide range of *kodan*-related materials collected by Tanabe, the most unique are the audio recordings of *kodan* broadcast on the radio from the 1960s to 2000s, the audio recordings of interviews with *kodan* performers themselves, and the audio recordings of *kodan* meetings hosted by Tanabe. Of these materials, the most valuable ones are audio materials (2) through (4), which were personally collected by Tanabe. Many of these materials are difficult to find in other collections given the circumstances at the time of recording.

#### ○ Work progress

This academic year, we are mainly digitizing cassette tapes manually using MP3 converters to prevent deterioration of sound quality and prepare them for future use as audiovisual materials. In the process of digitization, the cassette tapes were damaged by deterioration and other factors; however, a specialized company was hired to minimize the damage and complete the digitization process.

At this stage, about one third of the 887 items in the provisional catalog were identified and digitized. This has made future surveys and research on these audio sources possible without worrying about degradation of sound quality. However, about two thirds of the remaining audio sources have not been identified and digitized. These tasks will be addressed next academic year onward.

Meanwhile, the identification and matching of the performances themselves, which is conducted in parallel with the above, is difficult. This is partly because many of the materials are parts of full-length performances, and partly because it is difficult to create subheadings and correctly position them within full-length performances. Imaoka is playing a central role in identifying these performances with those recorded in shorthand materials and other documents, and Takiguchi Masahito is focusing on matching them with current performances.



## Overview Survey of Print Inventory Left Behind by Sakagawaya, the Original Publisher of Tokiwazu-bushi

Principal Researcher: Takeuchi Yuichi (Professor, Research Institute for Japanese Traditional Music, Kyoto City University of Arts)

Collaborative Researchers: Suzuki Eiichi (Adjunct Researcher, Theatre Museum, Waseda University), Tsuneoka Ryo (Director, Tokiwazu Association, Successor to Tokiwazu Iemoto), Abe Satomi (Part-time Lecturer, Musashino Academia Musicae), Maeshima Miho (Associate Professor, Kunitachi College of Music), Shigefuji Gyo (Lecturer, Waseda University Extension Center), Konishi Shiho (Collaborative Researcher, Kyoto City University of Arts)

### Research Objectives

In 1860, near the end of the Edo period, Sakagawaya inherited Tokiwazu woodblock prints from their original printer, Igaya. Sakagawaya continued to reprint these works as well as publish new works through the Showa period, printing original copies (practice books) from woodcuts up through 1987 or so. The “print stock” (stock of printed originals and unfinished copies, 47 boxes in all, numbering several tens of thousands of items) formerly owned by this publisher and donated to the Theatre Museum constitutes the “materials related to the original Tokiwazu-bushi in the Sakagawaya Collection” that are the subject of this study. This academic year, the main objective was to conduct an overview survey of a quarter of the total volume of the materials under study and to prepare a catalog documenting the results of the survey.

The materials used for study are stored in 47 boxes. Some parts of the Collection have retained, to some extent, the packaging from the time the publisher was still active. To preserve this valuable information as a record, the state in which the materials are stored in boxes and the state of the packaging in which the materials are bundled will be photographed. Furthermore, when unpacking, care will be taken to preserve the condition of the original packaging as much as possible.

### Summary of Research

From 2020 to AY2023, during a survey of approximately 800 Tokiwazu-bushi woodblocks (Sakagawaya Collection) held by the Theatre Museum, it was confirmed that the print stock left by Sakagawaya was contained in 47 cardboard boxes. Most of these are pre-shipment print stock, probably containing large quantities of hundreds or thousands of single prints, which look exactly the same and have survived in almost exactly the same packaging as at that time. The unique feature of the print stock is that the various stages of the process, from printing to binding, can be observed at hand: several hundred sheets printed at once and packed as is, folded and stacked, with or without binding holes, and with or without covers.

This academic year, we examined 10 boxes of approximately 91 books in the practice book inventory and photographed a selection of 59 books with relatively clear engravings and prints, converting them into data that were then used to create a provisional catalog with form classification and bibliographic information. We were able to identify 14 books with the same title but with new or old woodblocks, or with different printing dates (so-called “different editions”), and 37 books for which the existence of woodblocks could not be confirmed.

## Research on the Concept of “History of Japanese Performing Arts” in the Ozawa Shoichi Collection: Focusing on Changes in Sexual Expression

Principal Researcher: Suzuki Seiko (Associate Professor, Graduate School of Humanities, Osaka University)

Collaborative Researchers: Muto Daisuke (Professor, Faculty of Literature, Gunma Prefectural Women's University), Kakinuma Ayako (Specialized Researcher, Kinugasa Research Organization, Ritsumeikan University)

### Research Objectives

The Ozawa Shoichi Collection includes approximately 2,500 scripts for radio, television, film and theater performed by Ozawa Shoichi (1929-2012), a *shingeki* actor, as well as audiovisual media, scrapbooks, drafts, performance pamphlets, photographs, and more. The research team aims to investigate these materials and examine various aspects of sex-related culture in the “history of Japanese performing arts” as envisioned by Ozawa in the 1960s and 1970s.

### Summary of Research

The fact that more than half of the Ozawa Shoichi Collection had been cataloged by the Theatre Museum by the time the research began in April 2024, and that the digitization of open-reel tape recordings of interviews by Ozawa Shoichi in the late 1960s was underway, greatly advanced the starting point for this research. As noted in the UNESCO Magnetic Tape Alert for 2025, magnetic tapes are recognized as a top priority for digitization by archival institutions around the world because they are at risk of becoming unplayable.

The audio materials digitized at the Theatre Museum have value as a model project for other archival institutions and also have important material value for the content of this research. An analysis of the contents of the main open-reel tapes reveals that the interviewees were people Ozawa interviewed at the request of the popular newspaper *Naigai Times* in the 1960s. Among them, he conducted further interviews with the people

involved in “sex” and “art” for his first book, *Watashi wa kawarajokiki: ko* (Sanichi Shobo, 1969). Also included in the collection is a recording of an interview (by Ozawa and Katsura Beicho) with Katsura Nanten I (1889-1972), a connoisseur of rare Kamigata performing arts such as Nishiki shadow play, which led to the LP *Document: Wandering Arts of Japan* (Victor, 1971). Transcriptions of these materials, which can reveal the relationship between the oral and written worlds of the time, have been found. The transcriptions were discussed in a class at Osaka University and at a seminar held in February. For other recorded materials, because of the diverse backgrounds of the subjects, we are attempting to conduct a collaborative study in which audio materials are listened to and discussed with experts in each field.

To understand the historical context of these audio recordings, we are concurrently working on a detailed inventory of the scrapbook materials produced by Ozawa. These materials are a series of what we might call “ego searches.” Ozawa employed a company to collect articles about himself published in newspapers and magazines throughout Japan (documents related to these transactions have been discovered), and created scrapbooks containing a large number of these clippings. These are important documents that trace his constant attempts to control the image he presented to the world. In the future, by linking other materials under investigation, such as newspaper and magazine articles, pamphlets, scripts, and photographs to this inventory, we intend to organically build a database of the Ozawa Collection.

## Encouragement Research Project

In AY2020, the Center launched the Encouragement Research program to promote basic research for future joint research projects at the Center. This research is primarily conducted by the young researchers at the Theatre Museum. In AY2024, four research projects were selected and a wide variety of research activities were conducted.

The following four research projects were selected for AY2024: (1) Research on Materials Related to Osanai Kaoru (Kumagai Tomoko); (2) Representations and Narratives of World War II in Postwar Japanese Theater: Toward a Special Exhibition at the Waseda University Theatre Museum in AY2025 (Kondo Tsugumi); (3) Cataloging Rare Materials on Chinese Performing Arts in the Theatre Museum Collection (Li Jiaqiao); and (4) Research on

Japanese Romantic Comedy Films before and during World War II (Ku Mina). In each research project, researchers from within and outside the university collaborated to investigate and examine the vast and diverse materials of the Theatre Museum. Some of the results were presented at the Theatre Museum's fall exhibition, "100 Years of Tsukiji Shogekijo: The 20th Century of *shingeki*" and other events.

## Collaborative Projects

Since AY2023, the Center has held various events in collaboration with the Interdisciplinary Research Center for Performing Arts at the Kyoto University of the Arts, which is also accredited by MEXT as a Joint Usage and Collaborative Research Center.

### Joint Usage and Research Center Project

#### "In Times of Epidemic, War and Disaster: Samuel Beckett Film Festival 2024"

#### "Beckett's Experimental Short Films: An Evening of Screenings and Talks"

For the second year of the Joint Usage and Research Center Project, screening events on Samuel Beckett (1906–1989) were held at Waseda and in Kyoto under the title "In Times of Epidemic, War and Disaster: Samuel Beckett Film Festival 2024."

On December 17, 2024, Waseda University hosted an event titled "Beckett's Experimental Short Films: An Evening of Screenings and Talks" at the Ono Auditorium.

The first part of the event included five pieces: *Film*, the only film ever written by Beckett, starring Buster Keaton; *Quad*, a television play directed by Beckett himself; and *Not I*, *Play*, and *Breath*, three short films that could be considered derivative works in which other directors adapted Beckett's plays. All of the pieces were experimental and involved great directors, such as Anthony Minghella and Neil Jordan, and famous actors, such as Alan Rickman and Julianne Moore. Although they may not be directly

connected to "epidemic, war, and disaster" like *Waiting for Godot* or *Endgame*, all these films explore our subconscious, and echo the times in which we live. In the second part of the event, to discuss Beckett's world with a focus on the screened works, film director Shichiri Kei and playwright/director and representative of the NORUHA theater project Kageyama Kisyoudai participated in a talk, which was moderated by Okamuro Minako (professor at Waseda University) and Ozaki Tetsuya (professor at Kyoto University of Art). During the talk, using footage from films and theater productions in which Shichiri and Kageyama were involved, the panel discussed Beckett's world in detail, covering various topics including the sophistication (or lack thereof) of Beckett's works, the broad perspective of Beckett's works, his approach to media, and the appearance of his images.



## Project Organized by the Center

### Joint Research Projects on Theater During the Coronavirus Pandemic

The Center developed the results of the Urgent Theme Research projects that have been investigating trends in theater during the COVID-19 pandemic since AY2020, continuing to work on initiatives that will lead to new discussions on various domestic and overseas trends in theater, arts, and society.

#### Symposium

##### Chelfitsch's EIZO-Theater: Updating "Theatricality"

The Theatre Museum and the Center have been conducting ongoing research and studies on theater culture since 2020, when the spread of the COVID-19 pandemic began. In this context, we have also discussed how new forms of theater, such as video streaming of plays and hybrid performances, for which demand has increased due to the COVID-19 pandemic, have changed the audience's experiences and enjoyments of both the live and streamed forms of theater.

In recent years, chelfitsch has been exploring EIZO-Theater, a form of theater that creates a performance using life-size images of actors projected on a screen and the audience's imagination. *KAISOU: Layer, Class or Hierarchy*, which premiered in March 2022, made use of the theater structure consisting of a basement and audience seating to introduce a style in which the audience moves around the stage, peering down at images of the actors projected onto the basement from the stage. In *NEW ILLUSION*, which premiered in August of the same year, the company performed EIZO-Theater in a theater space, following the conventional style of stage and audience seating. These works are an attempt to shake up the definition of theater existing since Greek drama, in which plays are performed by live actors and in which the actors and audience share time and space, and make us rethink the relationship between video and theater. As an extension of previous pandemic-related initiatives, we examined the new possibilities that have emerged for theater after the pandemic through the

practice of chelfitsch, a company that has recently been exploring EIZO-Theater, a form of theater that creates performances using life-size images of actors projected onto screens and the audience's imagination.

In the first part of the event, filmmaker Yamada Shinpei, who launched EIZO-Theater together with chelfitsch, delivered a keynote speech. In his lecture, he explained in detail how the new experiment of EIZO-Theater was launched and how the works were created, focusing on the above-mentioned *KAISOU: Layer, Class or Hierarchy* and *NEW ILLUSION* and using a wealth of video footage. In the second part of the event, Yamada participated in a discussion with Okada Toshiki, the leader of chelfitsch, who writes and directs EIZO-Theater, and Nagashima Kaku of Tokyo University of the Arts, the longtime director of Festival/Tokyo and Tokyo Festival, as well as a dramaturg and Beckett scholar. Okamuro Minako, former director of the Waseda University Theatre Museum and a Beckett scholar, served as moderator. During the discussion, the participants engaged in a lively debate on such issues as how fiction emerges in EIZO-Theater and in what ways traditional theater and EIZO-Theater are similar or different, including comparisons with Beckett's works. This was an opportunity to consider the question of what EIZO-Theater means for theater in general, which has been based on the presence of live actors since Greek times, and to explore the future possibilities of theater as a whole.

An archive video of the event is available on the Theatre Museum's official YouTube channel.

### Joint Project with the National Film Archive Japan (NFAJ)

This academic year, the Center's attempt to "reconstruct" the various screening styles of the past using silent films from the Theatre Museum's collection, which has been ongoing since AY2018, was developed as a joint project with the National Film Archive Japan (NFAJ).

#### Workshop

##### Cinema and *Gidayu*: Voice and Sound in Old Theatrical Films

In Japan, during the silent film era, film screenings were narrated by *benshi* and enhanced by diverse voice cultures. Since 2018, the Center has been attempting to "reconstruct"

various screening styles of the past using silent films from the Theatre Museum's collection. This academic year, the initiative was developed into a joint project with the NFAJ to shed light on screenings involving *gidayu* performances.

This event was a workshop to discuss the process of research to realize the screening of "*kyugeki eiga* (old

theatrical films)” in the Theatre Museum’s collection, such as *Asagao Nikki*, with *gidayu* accompaniment.

In the first part of the event, Shibata Kotaro, junior researcher at Waseda University’s Research Institute for Letters, Arts and Sciences, gave a presentation entitled “Movie Theaters and *Gidayu* in the Silent Film Era: Clues from the Kushima Materials.” The presentation outlined the history of onstage *gidayu* in movie theaters during the silent film era and its spread using specific examples. In particular, it explained the popularity of screenings with onstage *gidayu* accompaniment at movie theaters in Sapporo during the Taisho era through materials related to Kushima Kogyo owned by the Theatre Museum. Following the presentation, Kodama Ryuichi, director of the Theatre Museum, introduced the works followed by a silent screening of *Asagao Nikki* (1909) from the Theatre Museum’s collection. In the second part of the event, NFAJ

chief researcher Tomita Mika gave a presentation entitled “The Appeal of Old Theatrical Films Featuring Onstage *Gidayu* as Seen through Materials.” Tomita introduced scenes of *gidayu* in *kyugeki eiga* which did not originate from *kabuki* plays like *Goro Masamune Koshiden* and *Ikkyu Osho to Nozarashi Gonsuke*. The presentation was followed by a screening of the *benshi* narrated version of *Kyugeki Taikoki Judanme: Amasaki no Dan* (1908) from the collection of the NFAJ. This version was a rare recording of an onstage performance by Okura Mitsugi in 1962. Following the screening, *gidayu shamisen* player Tsuruzawa Tsugajyu was invited to join Prof. Kodama Ryuichi for a discussion. During the discussion, Tsuruzawa’s own performance of *Amagasaki* was shown in a very rare edited version designed to accompany the silent version of *Kyugeki Taikoki Judanme: Amagasaki no Dan*, opening up the possibility of recreating the screenings of *kyugeki eiga* with *gidayu* accompaniment.

## International Collaborative Projects

Since the outbreak of the COVID-19 pandemic, the Center has been using online tools for active research exchange with foreign institutions to produce ample research outcomes this academic year as well.

### Japan-UK dialog

#### ***Kabuki* and Shakespeare in Performance: Past, Present, and Future - Part II**

The Theatre Museum (founded by Tsubouchi Shoyo, the first person to translate the complete works of Shakespeare into Japanese) has built a collaborative research relationship with the University of Birmingham in the UK and its Shakespeare Institute, a global hub for Shakespeare studies. Continuing on from the last academic year, the Center hosted Professor Tiffany Stern of the Shakespeare Institute for a Japan-UK dialog on “*Kabuki* and Shakespeare in Performance: Past, Present, and Future - Part II” (November 12, 2024, online, closed). Prof. Stern’s interlocutor was Prof. Kodama Ryuichi of the Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University, a *kabuki* scholar who is also the Director of the Theatre Museum.

The project aims to explore how we can approach and reproduce the performances that “do not remain” in *kabuki* and Shakespeare studies; furthermore, it exchanges

information that will contribute to mutual research, with the aim of laying the foundations for future comparative research on UK-Japanese theater. We exchanged information on what materials remain, what performances and materials can be restored or reproduced from them, and how we can reproduce and compare what may have existed in the past (the performances), rather than the plays themselves, in both the fields. This second part of the dialog addressed the following topics: (1) How should we explore acting, the most important yet least knowable aspect when considering theater in the past? What materials should we mobilize for that purpose? (2) How should we refer to current theater to understand the past? Or what other kind of theater should we refer to? (3) How should the audience, a very interesting but elusive entity, be studied? (4) From what time period (era) is there a wealth of pictorial and photographic materials in the UK? A record of the dialog will be made available on the website of the Center.

## Project Supporting the Decipherment of *Kuzushiji*

Since AY2016, the Center has been holding an “*kuzushiji reading support projects*” in conjunction with TOPPAN Inc.

The Theatre Museum has a valuable collection of Edo-era *yoruri maruhon*, which are very difficult to decipher because of their writing style. They are unique even among cursive *kuzushiji* writing. However, because the materials themselves are extremely important and useful for research on traditional arts, this project has worked to create a “*Kuzushiji OCR*” to enable even young international researchers and scholars make wider use of these materials.

This academic year, we created a new database of character notations for the *yoruri maruhon* “*Sugawara Denju Tenarai Kagami*” created in previous academic years, with a view to realizing an expanded comprehensive database of classical texts using *Kuzushiji OCR*. Furthermore, we carefully examined the content of the previously released character style dataset and updated it to enhance accuracy. These results will be made available on the Waseda University website and in the Waseda University Cultural Resource Database.

## Project to Utilize Theater- and Film-related Materials

The Center is making active progress with digitization of materials and database creation to preserve the valuable and diverse collection of the Theatre Museum and make it widely available to the public.

The Center is actively working to digitize the materials in the Theatre Museum Collection and expand the possibilities of how these materials can be used. This academic year, we digitized materials from the Theatre Museum Collection, focusing on the Komada Koyo Collection and on audio materials formerly owned by Ozawa Shoichi and Tanabe Koji. These digitized materials were made available to the

collaborative research teams studying the materials, greatly contributing to their research activities. Additionally, the project to utilize film-related materials such as silent films digitized in the past continued this academic year. During the academic year, this was developed into a joint project with the National Film Archive Japan (NFAJ) (refer to page 26 for details).

編集：長谷川 理絵 鳩飼 未緒 内田 隼美  
翻訳：クリムゾンインタラクティブ プライベート リミテッド  
発行者：文部科学省「共同利用・共同研究拠点」  
早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点  
拠点代表：児玉 竜一  
早稲田大学演劇映像学連携研究拠点  
〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1 早稲田大学早稲田キャンパス6号館  
TEL：03-5286-1829 URL：https://prj-kyodo-enpaku.waseda.jp/

Edited by: Hasegawa Rie, Hatokai Mio, Uchida Hayami  
Translated by: Crimson Interactive Pvt. Ltd.  
Published by: Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology-Japan  
“Joint Usage / Research Center”, Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts,  
Theatre Museum, Waseda University  
Center Leader: Kodama Ryuichi  
Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, Waseda University  
Building 6, Waseda Campus, Waseda University, 1-6-1 Nishi-Waseda, Shinjuku-ku,  
Tokyo, 169-8050  
(+81)3-5286-1829 URL: https://prj-kyodo-enpaku.waseda.jp/